

三崎嘯輔の生涯

Note on lifetime of a chemist, Shôtsuke Misaki, dying at a young age.

保科 英人
Hidetoto Hoshina

I. 三崎嘯輔と福井藩出身の理科系人材

最も有名な幕末の福井藩士は橋本左内（1834–1859）である。左内は英主・松平春嶽（1828–1890）の意向を受けて上京し、十三代将軍徳川家定の後嗣問題で一橋派に属した主君・春嶽の懐刀として、数多の陰謀渦巻く京都の政界で活躍した。結局、将軍後嗣問題は、紀州藩の慶福を推す紀州派の勝利に終わり、一橋慶喜を推戴せんとした一橋派は敗北した。紀州派の棟梁ともいべき井伊直弼（1815–1860）は大老に就任後、反対派への弾圧を始めた。世に言う安政の大獄である。左内は捕えられ刑場の露と消えた。享年 26 歳。

幕末の一時期、国内政局の主導権を握るかに見えた福井藩であったが、薩長両藩による討幕路線が固まると、やがて国政に対する影響力を失っていく。明治時代以降の旧福井藩士たちは藩閥外として新政府内で冷遇された。能力がありながら、薩長藩閥の高い壁に阻まれ、力を発揮できず、歴史の波間に埋もれてしまった有為の人材は少なくなかったにちがいない。現代福井でこういった議論がされる際に、「左内が明治以降も長命を保っていたら」との悔い事はよく聞かされるものだ。if を述べることは史学的にあまり意味があることとも思えないが、左内がそれだけ高く評価されていることの裏返しではある。

このように今なお福井県人の崇拝の対象となっている橋本左内であるが、彼の福井藩士人生は、まずは医者（＝理科系技術者）としてスタートしたことを知っている人は、それなりの歴史通にちがいない。左内以外の幕末福井の理科系人材としては、種痘の定着に尽力した笠原白翁（1809–1880）や、左内の末弟で明治以降に軍医総監や日本赤十字社病院長となった橋本綱常（1845–1909）、日本昆虫学の発展に大きく貢献した佐々木忠次郎（1857–1938）などがある。こうしてみると、当時の福井の理科系人材はなかなか多士済々であることがわかる。

しかし、ここでもう一人、現代福井では忘れられてしまった福井藩出身の理科系俊才を挙げなくてはなるまい。その名を三崎嘯輔（字は尚之）（1847–1873）という化学者である。幕末福井藩が生んだ英才といえ、まずは前述の一流中の一流の志士である橋本左内、ついで志半ばで米国で病没した日下部太郎（1845–1870）なのだが、化学者の三崎嘯輔もまた二人に劣らぬ逸材であった。三崎は風のように駆け抜けた短い生涯の中で『薬物雑物試験表』（明治 4 年）『化学器械図説』（明治 5 年）等の化学関係の訳著書を世に送り出した。ただ、三崎の存在が地元福井県ですらほとんど知られていないのは残念だ⁽¹⁾。

三崎の知名度が地元福井ですえ高くないのは、彼は化学者ではあったが現代の化学の教科書に記述されるような発見や新理論を構築していないことも無関係ではあるまい。もっとも、三崎のために弁護すれば、彼は明治 6 年、20 代半ばで急死したことに加え、当時の日本の化学の水準は本人にかなる優れた才があろうとも、世界的な業績を残せる域に達していなかったと言える。

三崎の最大の事績は化学の純粋な学問研究というよりは、前述の諸書を刊行し欧米列強の化学理論

キーワード：三崎嘯輔，化学者，近代科学史，松平文庫，福井藩

を日本に紹介したこと、また日本の近代化学の出発点となった大阪舎密局（現代風に言えば理化学学校）の中心人物となったことにある。化学者ではなく化学教育者と呼んだ方が適切であろうか。いずれにせよ、彼は日本の近代化学の黎明期の特筆すべき人物であることは疑いがない。

残念ながら『福井県大百科事典』⁽²⁾を含め一般の公立図書館で読むことができる多くの歴史系人名事典では三崎嘯輔の名を見つけることができない。『朝日日本歴史人物事典』⁽³⁾『講談社日本人名大辞典』⁽⁴⁾は三崎を立項している数少ない例外的事典かと思われる。もちろん、これらの人名辞典は一人当たり割いた文章量が少なく、また記述に用いた典拠文献が明記されていないといった辞典としての限界はある。

三崎の経歴をもっとも詳細に記した文章は、かつては菅原国香氏の概説文であった⁽⁵⁾。また、石橋栄達氏が三高の同窓会の会報に三崎の事績を紹介したやや古い文献もある⁽⁶⁾。石橋氏の報文は、著者の友人が三崎家を直接訪問して得た史料を活用している点に特色がある。

1995年に藤田英夫氏が明治初期に大阪に設立された舎密局（理化学学校）に関する研究書⁽⁷⁾を発表し、その中で従来知られていた三崎の履歴に新知見をいくつか加えた。なかでも、80年代当時健在であった、三崎と離縁した後に再婚した女性の末娘の方から藤田氏が得た証言は極めて貴重な記録と言えよう。

近年、共同通信社の小川明氏がやはり三崎の生涯を追跡して、2007年の福井新聞にその成果を記事として載せている⁽⁸⁾。その内容は藤田氏の知見をほぼ踏襲しているが、三崎家に伝わる嘯輔の死去前後の謎や三崎家史料の散逸の事情に言及している点が特筆される。小川氏の報告はあくまで新聞記事なので、引用文献は明示されていない。つまり、情報の出処や一次史料で裏を取れるか等の疑問が少なからず残るものの、全体としては参考資料として重宝できるものである。

これら諸文献に載った三崎の経歴を突き合わせると、だいたいにおいて相互に矛盾がなく、ほぼ一致していることがわかる。それもそのはず、これらの文献は全て『稿本神陵史』⁽⁹⁾を根本的史料として活用しているからだ。三崎を研究する上で、『稿本神陵史』はまずは出発点とすべき基本史料なのである。

この『稿本神陵史』をベースとし、そのうえで、前述の藤田氏の研究書、小川氏の研究成果⁽¹⁰⁾、福井県出身の自由民権運動の大物・杉田定一の伝記⁽¹¹⁾や前掲『朝日日本歴史人物事典』、また本項でたびたび引用する芝哲夫氏の論文等を参照して、三崎の略歴を作成してみた（表1を参照）。ここで示した表は、これらの資料をまずは鵜呑みにして作った段階のものと解釈されたい。

II. 三崎嘯輔をめぐる人々

三崎の生涯を検証する前に、彼に深い関わりを持った二人の人物の略歴を紹介しておきたい。一人目はハラタマなる外国人である。ハラタマは1831年オランダのアッセン市に裁判官の父親の末子として生まれた。1847年にユトレヒト市にある国立陸軍医学校に入学した。ここで、のち来日するボードウインの知遇を得る。ハラタマは卒業後軍医の資格でオランダ陸軍に入った。成績優秀だったらしく、軍医の教官に抜擢され、物理学、化学、解剖学、生理学などを教えたのち、慶應2年（1866年）4月に来日した⁽¹²⁾。長崎に設立された理化学学校である分析究理所の教師として招かれたのである。明治海軍の源流に位置する幕府海軍はオランダ流でスタートしたのだが、日本の本格的近代化学もまたオランダを師として産声を上げたのである。

徳川幕府が安政2年（1855年）に長崎に開設した海軍伝習所は江戸から遠いことが致命的欠陥となり安政6年（1859年）に閉鎖されたが⁽¹³⁾、どうやら長崎で医学教育を行っていたボードウインも同じことを痛感したらしい。ボードウインは医学校とともども分析究理所を江戸に移すことを幕府に働きかけた⁽¹⁴⁾。幕府はその建議を受け入れ江戸の開成所内に校舎を建設し、ここで本格的な化学教育を実施することが決定された。ハラタマが江戸に入ったのは慶應3年（1867年）2月である。もっとも、翌年には江戸で上野戦争が勃発。江戸は大混乱に陥り、ハラタマの困惑ぶりが容易に推察される。

表1 従来の知見による三崎嘯輔の略歴

元号	西暦	年齢	事項
弘化4年	1847年		5月11日福井藩医の三崎宗庵（草庵）の末子として生まれる 幼名は虎三郎。のち、宗玄、嘯輔、嘯。字は尚之
文久元年	1861年	14歳	蘭学修行のため江戸に上り、大鳥圭介の塾に入る
文久2年	1862年	15歳	藩主夫人の帰藩に同行して、福井に帰郷する
元治元年	1864年	17歳	禁門の変勃発。三崎は長州勢敗退後に入京し、一か月ほど滞在して警衛にあたる 10月、済世館の句読師に就任する
慶應元年	1865年	18歳	1月、医学修行のため長崎へ遊学する
慶應2年	1866年	19歳	長崎に招かれたオランダ人化学者ハラタマに随身し、分析究理所で化学を学ぶ 他の日本人学生のためにハラタマの講義を通訳する 長崎留学中に三崎宗仙の養子となる
慶應3年	1867年	20歳	分析究理所を開成所内に移すことに伴い、ハラタマとともに江戸に入る
慶應4年 (明治元年)	1868年	21歳	この年明治維新(明治と改元)。6月20日、養父宗仙の家督(150石)を相続する ハラタマとともに江戸から大阪に向かう 6月24日、会津従軍を命じられる 9月17日、天朝御雇御医師を拝命し、越後・柏崎大病院診察方となり、医務に従事する 11月、舎密局設立のため、藩主より大阪府出仕を命じられる (この年に東京の下谷に私塾を開いたとする解説もある)
明治2年	1869年	22歳	田中芳男らの尽力で大阪舎密局が完成する。教頭はハラタマ 三崎は嘯輔と改名する。舎密局の大助教となる。ハラタマの講義を通訳する (この頃、三崎を頼って杉田定一が上阪してくる)
明治3年	1870年	23歳	舎密局が大学管轄となったことにともない、大助教となる 舎密局は理理学と改名、ついで洋学校と合併し開成所内の分局となる。
明治4年	1871年	24歳	開成所から御用済となり、福井に戻る。グリフィスと交流し、明新館でドイツ語と化学を教える 上京し、文部大助教、ついで文部少教授に任ぜられる 東京の下谷に私塾を開き、ドイツ語および化学を教える
明治5年	1872年	25歳	1月東校(現在の東京大学医学部の前身)の予科の少教授に任ぜられる 3月明治天皇が東校に行幸。直垂・たすきがけの出で立ちで化学実験を行ったと伝えられる 9月文部七等出仕を仰せ付けられる
明治6年	1873年	26歳	5月11日福井に帰省。宗仙の娘・鈴と結婚するがすぐに離縁する 15日病により急死。死因は結核という説がある

幕府から新政府に所管が移された開成所内の理化学学校は、江戸から大阪に移転することとなった。ハラタマもそれにともなって、明治元年(1868年)中には大阪へ移動した。明治2年5月、大阪城西の大手前にハラタマを教頭とする理化学専門の高等教育機関である舎密局が開校された。『官版明治月刊』に掲載された「舎密学を興すの記」⁽¹⁵⁾には、化学は鉱物学、薬学、医学、地質学等のあらゆる分野につながる重要学問であるにもかかわらず「未だ大に世に明ならざるにより」大阪に舎密局を設立したと、その目的がうたわれている。ちなみに、“舎密”とは聞きなれない日本語だが、化学を意味するオランダ語の *Chemie* の音読「せいみ」の当て字にすぎない⁽¹⁶⁾。また、“舎密”は明治維新时期に初めて登場した単語ではなく、江戸後期の宇田川榕庵(1798-1846)によって既に造られていた訳語である。

舎密局の初代教頭時代のハラタマの「日本政府から3月と4月分の給料と、前の2月の給料不足分

の百ドルの、総額千三百メキシコドルを受け取りました」(1869年5月25日)との自筆の受取書が残されている。計算すると、彼の月給は約600メキシコドル程度と推算できる。これが高いのか安いのか、いまいちピンとこないが、二代目教頭のドイツ人のリッテルの月給が約300ドルで、また同じくお雇い外国人として有名なグリフィスの当時の月給もその程度だったらしいから⁽¹⁷⁾、ハラタマはそれ相応の処遇を受けていたと言えよう。ハラタマの契約は明治3年までであり、翌年オランダへ帰国の途についた。舎密局は明治3年4月に校名が理学校、同年10月には洋学校と合併して大阪開成所内理学所と改名されるという変遷をたどる。しかし、その理学所も明治5年には廃止され、結果的に舎密局およびその後身学校は組織としては短命であったことは否めない。しかし、日本の化学の発展の基礎を築いた⁽¹⁸⁾という点で舎密局は決して見逃せない存在なのである。

三崎をめぐる人々の二人目として取り上げたいのが、この舎密局の設置に尽力し、かつ開設後は御用掛に就任したのが元幕臣の田中芳男(1838-1916)である。田中は1867年パリで開催された世界大博覧会に自ら製作した昆虫標本56箱を携えて出品した経歴を持つ⁽¹⁹⁾。維新後は文部省博物館の博物館掛に抜擢され、のち東京上野の博物館および動物園の設立に大きく貢献した⁽²⁰⁾。明治23年には貴族院議員、大正4年には国家への功績が大であるとして男爵の爵位が与えられている。世間一般の知名度はともかく、田中芳男は筆者の本職である昆虫分類学の世界では、その学問史を語るうえで絶対に外せない人物なのだ。ちなみに舎密局の開校式当日の記念写真が残っていて、そこでは田中と三崎が並んで写っている⁽²¹⁾。

Ⅲ. 三崎家と福井藩医学界

三崎家は中世から続く代々医者の家系である。三崎家は元々姓を三段崎といい、越前の名門武家の朝倉氏の血を引くという。戦国時代の三段崎安宿の時に、朝倉孝景の侍医となり姓を三崎と改め玉雲軒と称した。三崎玉雲軒は朝倉家滅亡の後、京都に出て数々の医書を残し、慶長12年(1607年)に95歳で亡くなった⁽²²⁾。

江戸前期には三崎道庵という人物が出た。当時、三崎家は越前松平家の侍医であったが、道庵は知行を奉還し町医者となった。後日、道庵は登城して藩主より「旧のごとく侍医として勤めよ」と申し渡されたが、「一度辞めたのだから、従来通りではお受けし難い。千石下されればお勤めする」と答え、藩主を苦笑させた。このことから道庵には千石坊との綽名がついたという。この時は復職の話は沙汰やみとなったのだが、最終的には道庵は侍医に復している。この道庵が近現代に至るまでの医師・三崎一族の直系先祖とされている⁽²³⁾。

文化2年(1805年)、福井藩医学所済世館が創設された。戦後の福井市医師会が済世館の精神を自分たちが継承していると自負するぐらい、済世館は越前の医学界に少なからぬ影響を与えた組織である。『済世館小史』⁽²⁴⁾には文久元年(1861年)の済世館の執事名列が載っていて、総管5人のうちの1人が三崎宗庵で、会主2人のうちの1人が三崎宗仙である。この執事名列に名を連ねるこの宗庵こそが嘯輔の実父である。そして、会主の宗玄が嘯輔の養父および舅にあたる人物である。なお、『稿本神陵史』は三崎嘯輔の父の名を三崎草庵(表1)としている。しかし、明治以降の文書には草庵と記されているものがあるので、誤字であると細かく指摘する必要はあるまい。

ここで福井県文書館の柳沢美美子氏にご提供いただいた松平文庫(江戸時代の福井藩の公文書類)の福井藩士の履歴に関する史料「剥札」(未公刊)⁽²⁵⁾から、三崎宗庵および宗仙の略歴を一部抜粋してみよう。

<三崎宗庵>

百五拾石

文化十二亥 三崎宗庵病中願之通養子ニ被仰付、家督百五拾石無相違被下置、表御医師被仰付

文政十亥 奥医被仰付

弘化三午 家内不和熟奥御医師御免、表御医師被仰付

嘉永五子 奥御医師被仰付候
文久三亥 年寄候ニ付隠居被仰付

＜三崎宗仙＞

宗庵養子
嘉永五子 奥御医師御雇被仰付候
文久三亥 養父宗庵年寄ニ付隠居被仰付，家督百五十石無相違被下置
慶應元丑 除痘館当番皆勤ニ付御褒詞
慶應二寅 堺町戦争一件ニ付，公儀ヨリ被下配当金千疋被下置候
慶應四辰 病死

嘯輔から見て宗庵は実父、宗仙は養父である。上記の略歴のうち目を引くのは宗庵が弘化3年(1846年)に家内不和により、奥医師から表医師に降格処分を受けている点である。のち嘉永5年(1852年)に奥医師に復帰しているため、致命的な家庭内問題を引き起こしたわけではないだろうが、やや気になる点である。この家内不和は、のち嘯輔が養家の娘と結婚するもすぐに離縁したというキナ臭い事実(後述)との関係性を疑うこともできるが、詳細は不明である。

つぎに、除痘館とは濟世館に併設された種痘のための医療機関である。福井に種痘を定着させたのはI章で述べたように笠原白翁であるが、宗仙もまた種痘に携わっていたことがわかる。以上まとめると、嘯輔の実父および養父とも奥御医師を勤めるなど、嘯輔の家が福井藩医学界における重鎮であることが改めてうかがえるのである。

IV. 福井藩の公式記録にみる三崎嘯輔

前出の柳沢美美子氏(福井県文書館)から提供していただいた、松平文庫にあった三崎嘯輔の履歴を以下に記す。上記のように嘯輔の家は代々医者の家柄であるが、かつ福井藩士としての籍も有している。以下の3史料のうち、「士族」の嘯輔の履歴記録は柳沢氏からいただいたもので、福井藩旧蔵の「松平文庫」人事記録921号「士族」にあったものである。一方、927号「藩医」に別個記載されていた三崎の履歴については『福井県医師会史』⁽²⁶⁾ですでに翻刻されている。

「士族」

三崎宗玄(嘯輔)

宗仙養子実宗庵実子

百五拾石

文久元酉年願之上江戸修行詰

- 一 同二戌三月廿六日昨年蘭学并英学為修行出府罷在候処今度蕃書調所へ入門被仰付候儀も有之ニ付旁以修行中為失却月々金式歩ツ、被下置候
- 一 同年十二月廿日医術為修行出府罷在候ニ付右修行中御扶持方三人扶持被下置候
- 一 同三亥三月廿三日御前様御供ニ而帰着
- 一 元治元子七月上京八月廿六日帰
- 一 同二丑正月廿九日医道為修行長崎表へ罷越候様被仰付，二月八日出立
- 一 慶應二寅四月十七日舍密術取調之儀ハ申談取斗候様被仰付候
- 一 同廿四日堺町戦争一件ニ付公儀ヨリ被下配当金千疋被下置候
- 一 同年七月廿二日舍密術取調ニ付来卯ノ秋迄修行罷在候様被仰付候
- 一 同三卯二月医術修行長崎表ニ罷在候処師匠江戸表江罷出候ニ付同道出府壺岸嶋御屋敷ニ罷在候
- 一 同年九月廿五日帰
- 一 同年十月十七日奥御医師雇被仰付候

- 一 同廿三日江戸表江出立，辰二月十六日帰
- 一 同四辰六月廿日養父宗仙家督百五拾石無相違被下置，表御医師被仰付
- 一 同月廿三日奥医師被仰付
- 一 同年六月廿五会征出立，十一月廿三日帰，巳二月廿二日出張十式兩被下候
- 一 明治ト改元，十一月廿七日出坂
- 一 同二巳二月六日宗玄事嘯輔ト改
- 一 任大助教
- 一 同年十一月廿五日今般御改革更給禄米八十式俵壹斗式升壹合
- 一 同三午四月廿五日戊辰北越出張軍事精励ニ付御賞典之内十石三ヶ年令頒授候事
- 一 同年十月三日山県三郎返上屋敷内ニ而式百六十九坪拝地被下候
- 一 同四未三月十三日昨年拝地被下置候処他国留守，且家作等も出来兼候ニ付是迄之通子安丁ニ当分其居居住仕度旨，願之通被仰付候但拝地之儀ハ可致返上事
- 一 同東京へ罷出文部省大助教，夫ヨリ從七位守，少教授拜命
- 一 同六年五月親対面願帰省之处同月十五日病死

「藩医」

三崎宗玄 嘯輔

一 高百五拾石

同（慶應四年）六月廿日養父宗仙家督如此無相違被下置表御医師被仰付

但無息ニ而相勤候分別帳ニ記之

同月廿三日奥御医師被仰付 明治ト改元十一月廿五日大坂府御用有之御雇被仰付候間出仕可申付候事

同二巳二月七日嘯輔与改名

このほか，同じ松平文庫の 997 号「會津征討出兵記附録」でも三崎の名を確認することができる。

「會津征討出兵記附録」

賞罰之部

（中略）

賞金詳ナラス 慰労金詳ナラス 軍事精励金十兩

醫員

三崎宗玄

（注，軍事精励金を受領した医員として，三崎以外の 12 人の名が列記されている）

以上が，現在筆者が把握している松平文庫中の三崎の主な記録である。

V. 幕末の三崎嘯輔

筆者が知るかぎり，松平文庫上の三崎嘯輔の履歴を取り出して論文上に書き記したのは本稿が初であると思われる。この福井藩の公式記録と既存論文を比較してみた。結論を先に言えば，今なお一次史料で確認できない箇所は少なくないものの，表 1 の三崎嘯輔の略歴のベースとなっている『稿本神陵史』の記述は，再検討の必要性をあまり感じさせない，ほぼ正確なものであることがわかった。とはいえ，多少気になる点がなきにしもあらず。以下，表 1 の内容について，個々検討していくこととしたい。

これまでの三崎研究は，三崎の化学知識がどのレベルに達していたか（たとえばアボガドロの分子説をどこまで理解していたか等），また，三崎の著作が当時のどの外国の化学書を参考にして書かれたものかなどが検証の中心であった。菅原氏の概説文⁽²⁷⁾はその最たる例である。

筆者は化学に関しては素人である。最初にお断りしておくが、本稿では三崎の化学史的再評価を一切試みていないことをご理解願う。19世紀に流通していた化学の専門書を読み解いて、三崎の訳本と比較検討し、彼の化学知識水準を考証することは明らかに筆者の能力を超えるからである。本稿はあくまで三崎の履歴を純粹に史学的な観点でのみ追うことを目的とした。

①生誕から江戸留学期まで

三崎の生年月日については、現在筆者は福井藩の公式記録等で確認を取れていない。ここは『稿本神陵史』にしたがい、弘化4年（1847年）5月生まれとしておく。幕末を告げるペリー来航をさかのぼること6年前である。表1にある「三崎嘯輔は草庵（ママ）の末子」とは、前出の菅原氏⁽²⁸⁾や芝哲夫氏の論文⁽²⁹⁾でも無条件で踏襲されている『稿本神陵史』に基づく記述であるが、少なくとも松平文庫上の履歴からは嘯輔が宗庵の何番目の子であるかは不明だ。

つぎに、今のところ筆者は、菅原氏と石橋氏の報文⁽³⁰⁾などが『稿本神陵史』から引用したと思われる「虎三郎」という幼名についても、松平文庫からは見出せていない。さらに、残念なことに、嘯輔の幼少時代については諸文献から伝わる場所がない。嘯輔は先祖代々の名門医師の家の子息として相応の教育を受けたであろうが、いかなる組織で何歳から学問を始めたか等については今後の一次史料の発掘を待たねばならない。

文久元年（1861年）14歳の時に三崎は洋学修行のため江戸に上った。『稿本神陵史』は、三崎は父らに伴われて江戸に向かったとするが、松平文庫には実父・宗庵および（後の）養父・宗仙の少なくともどちらかが、この時期江戸に滞在したことを明記していない。つまり、父に伴われた江戸行きだったことを今のところ一次史料で裏が取れない。

一方、松平文庫から得られた重要な情報が二つある。一つ目はこれまでの知見では、三崎の江戸留学は蘭学修行のためとやや目的があいまいであったのが、文久2年（1862年）に藩より幕府の蕃書調所への入門を命じられていたこと。二つ目は「蘭学并英学修行為」、つまり目的が蘭学と英学の両方だった点である。これまでの諸文献では、若かりし日の三崎は蘭学修行に勤しんでいたとされていた。実際に三崎がどの程度英語を学んだかどうかは別にして、江戸遊学の時点で英学も習得対象の一つとされていたのは興味深い。三崎が学んだ語学については、後章でまとめて考察したいので、ここではこれ以上立ち入らない。

江戸滞在中の三崎の師がのちの戊辰戦争の大立者・大鳥圭介（1833-1911）だったことは、多くの既存文献が『稿本神陵史』から引用しているところである。もちろん松平文庫にある「三崎が蕃書調所での修行を命じられた」記述と、従来の「大鳥の私塾で学んだ」との両方の知見は矛盾しない。正規の学校教育を受ける傍ら私塾に通うことは、現在も幕末も大差はないからである。

しかし、三崎が大鳥に師事していたことは、松平文庫はじめ福井藩側の一次史料で確認できていないのもまた事実である。大鳥が自ら語った「大鳥圭介自伝」⁽³¹⁾では、師である緒方洪庵や江川太郎左衛門については多々語っているものの、逆に自分の弟子に対する言及はない。大鳥存命中の明治35年1月から3月にかけて神戸又新日報で連載された伝記でも、同様に幕末期の大鳥の弟子たちや私塾に関する記述はない。また、一般的な書籍伝記類には、大鳥が私塾を開いていたことを記していないのである。大鳥の私塾の実証やその弟子たちの名を明らかにするとすると、大鳥自体を本格的な研究対象とせねばならず、さすがに現在の筆者はそこまで踏み込めない。大鳥圭介関連史料の整理を進めている学習院大学史料館に個人的にうかがった話では、「旧幕臣関連の史料は全て調べたわけではないが」との前提ではあるが、「少なくとも学習院大学に保管されている大鳥自筆の経歴書には自らが主宰した塾の記述はないし、他史料でも見たことがない」とのことであった。

三崎が江戸に向かった当時、医師の家出身の大鳥は万延元年（1860年）に尾崎藩から徳島藩に籍を移し、『築城典刑』『砲火新論』などの訳書を出版した30歳前の気鋭の兵学者として名を売っていた⁽³²⁾。一見、医学書生であった三崎との直接的な関連性は見出しがたいが、大鳥は坪井為春（＝大木仲益）の私塾生時代、左内を長兄とする橋本三兄弟の次男の綱三郎（＝綱維）と同窓であった⁽³³⁾。

為春の塾生は30余名を数えたというが⁽³⁴⁾、その中で優秀な大鳥は坪井塾の塾長に処せられたほどであった。綱三郎はこの大鳥と蘭学研究に勤しんだという⁽³⁵⁾。また、当時の為春は文久元年に幕府が設立した西洋医学所の教授だったので⁽³⁶⁾、為春が医学書生の三崎と自然と親交ができ、大鳥とも縁ができたのかもしれない。いずれも憶測の域を出ないが、大鳥と福井藩関係者との縁が、三崎と大鳥を繋いだとの推測が可能であることだけはここで指摘しておこう。

「三崎は大鳥が塾長をしていた大木仲益（＝坪井為春）の塾に寄宿し2年以上勉強し帰国した」との同時代人の回顧談もあるが⁽³⁷⁾、大鳥が塾長になったのは安政元年（1854年）である⁽³⁸⁾。三崎の江戸遊学時とやや年代が合わず、この回顧談の無条件での採用はためられるが、ここでも大鳥との関係を述べている点は見逃せない。筆者は、三崎が個人的に大鳥に師事していたことがやや誇張されて、「三崎は大鳥圭介塾で学んだ」と伝わったのではないかと推測している。「～塾」と聞けば緒方洪庵の適塾のようにある程度組織的な学問所を想定しがちであるが、大鳥の塾とはそこまでのものではなく、弟子たちが三々五々集まって大鳥から学問を学んでいたのではなかろうか。

大鳥圭介の一次史料といえば、国立国会図書館憲政資料室所蔵の関係文書や書簡類⁽³⁹⁾などがあるが、ほぼ全てが明治以降の時期の文書である。大鳥関係史料を最も多く有する学習院大学は数年後の完成をめぐり史料の全目録を作成中とのことであるが⁽⁴⁰⁾、ここでも大鳥と三崎との子弟関係を直接証明する史料の発掘はあまり期待できそうにない。

以上、江戸留学時の三崎については、蕃書調所で学んだということ以外は不明な点が多いことはたしかである。

②禁門の変に従軍

松平文庫「士族」によると、三崎が江戸留学を打ち上げ、藩主夫人の一行に加わって福井に戻ったとされるのは文久3年（1863年）17歳の時である。一方、『稿本神陵史』では、三崎は文久元年9月に江戸に入り、文久2年3月に福井に戻ったとするが、これに素直に従うと、三崎は半年足らずしか江戸で学んでいないことになってしまう。『越前松平家譜』⁽⁴¹⁾によれば、松平春嶽夫人である勇姫と息女である安姫は文久3年3月6日江戸発、同月23日福井着とある。ここは松平文庫「士族」のとおりに三崎の帰藩は文久3年とすべきだろう。

元治元年（1864年）、三崎は戦乱勃発に伴って上京する。戦乱とは同年7月19日長州藩と薩摩、会津、福井その他諸藩の軍勢が京都で武力衝突した禁門の変のことである。三崎が刀を抜いて切り合うことを藩当局から期待されていたとはどうも思えず、現代風にいえば軍医としての役目を求められたのだろう。7月6日、福井藩兵は二手に別れて福井を發ち、山県三郎兵衛率いる一隊は西近江路を進み、もう一方の粕帯刀の隊は東近江を通して京の都を目指した。福井藩の幕末期公式歴史書といふべき『続再夢紀事』⁽⁴²⁾には、誰かが斥候に出ただの、どの藩士が奮戦のち戦死したただの、固有名詞を挙げた詳細な戦闘報告が記録されている。当然のことながら負傷者も多かったが、残念ながら『続再夢紀事』からは、三崎の軍医としての活躍ぶりを知ることはできない。

『稿本神陵史』によれば、そもそも三崎は大谷丹下の配下として堺町御門の警備にあたったと記しており、どうやら戦場には姿を現さなかったと言いたいようである。『稿本神陵史』の記述から、三崎は禁門の変の戦闘終了後に入洛した（＝入京した）と解説されていることもあるが⁽⁴³⁾、これは間違いである。と言うのも、松平文庫1002号「堺町守衛兵防戦雑記補遺」という史料があり、その「元治元子年七月十八日京都堺町御門防戦之際在京藩士名列」の「御医師」12名の中に三崎の名があるからだ⁽⁴⁴⁾。三崎が弾丸飛び交う戦場の間近に身を置いたかは別にして、戦闘があった7月19日の段階で彼が京都にいたことは確実である。

松平文庫「士族」の履歴では、この時の三崎について「元治元子七月上京八月廿六日帰」と簡潔に記すのみだが、上京時期といい、慶應2年に「堺町戦争一件二付」幕府より配当金を貰ったことといい、上記の「堺町守衛兵防戦雑記補遺」内の記述などから、三崎が禁門の変に従軍したことは一次史料で証明されている。

③長崎留学時に化学に転向す

『稿本神陵史』は、禁門の変直後の元治元年（1864年）10月、三崎は藩済世館の句読師を命じられたとするが、今のところ筆者は松平文庫「士族」でこの履歴を確認していない。昭和初期に編集された『済世館小史』⁽⁴⁵⁾でも三崎のこの人事に係る記述はなく、諸史料で裏付けできていないのが実情である。

三崎の人生を決定づけたのは、文久の江戸留学ではなく、慶應年間の長崎留学である。名門医師の三崎家に生まれた嘯輔は、九州の地で医学ではなく化学を志すようになるのである。なお、『稿本神陵史』によれば長崎留学中の慶應2年に嘯輔は宗仙の養子になったとされるが、その正確な年月については松平文庫「士族」の記録からは明らかでない。

重箱の隅を突くようで申し訳ない。表1に記したとおり従来の知見では「三崎は慶應元年1月に長崎留学を藩より命じられた」となっているが、元治2年（1865年）4月をもって慶應に改元されているので、正しくは「元治2年1月に～」である。

元治2年1月、当時19歳の三崎は藩より医学修行のため長崎留学を命じられ、2月8日に故郷福井を発った。三崎は山本匡輔や半井元端とともに福井から大坂に出て、船で下関に向かい、そこを経て長崎に着いた⁽⁴⁶⁾。現在三崎と確実に同定されている写真は明治2年の大阪舎密局時代のもので、そこでの三崎は長髪である。しかし、三崎とともに長崎で学んだ山本匡輔の明治44年の回顧談によると、元治2年福井出発当時、三崎は坊主頭だったらしい。もっとも、徐々に髪を伸ばし、いがぐり頭になったという⁽⁴⁷⁾。長崎留学時の三崎と推定される人物の写真が残っているが⁽⁴⁸⁾、たしかにその若者はいがぐり頭である。

『稿本神陵史』を引用した諸文献中の従来の三崎の履歴中で、最も大きな欠落は蘭医ボードウィンと三崎との関係の記述である。これまでは「三崎は長崎に留学し、そこで化学者ハラタマに弟子入りした」式の簡略化された記述が目につくのである。安政4年（1857年）から文久2年（1862年）まで長崎に滞在し、オランダ式医学教育と患者の治療にあたった蘭医ポンペの後任にあたる人物がボードウィンである。ボードウィンは帰国するポンペの推薦で文久2年9月に長崎に到着した。ボードウィンもまたポンペ同様名声諸方に聞こえ、ポンペから引き継いだ日本人学生は50人だったが、慶應2年（1866年）には200人に膨れ上がった⁽⁴⁹⁾。

福井藩からは前述の三崎、山本、半井のほか、橋本綱常、橋本綱維らもボードウィンの元に派遣され、彼らは長崎精得館でオランダ式医学を学んでいた⁽⁵⁰⁾。ボードウィンの略伝でも弟子の一人として三崎の名を挙げている文献もあり⁽⁵¹⁾、三崎がボードウィンについて学んでいたことが、これまで諸文献中でほとんど言及されてこなかったのは、やや解せないところだ⁽⁵²⁾。これは「三崎はどこで誰からオランダ語の会話能力をマスターしたか」という問題に深く関わる点である。このことは、この章で今一度考察することとしたい。

さて、長崎留学時代の三崎に興味深いエピソードが残っている。少々長いが書き出してみよう。

「橋本はいつも多くの書籍を風呂敷に包み（萌黄に五七桐の紋を染め抜きたる）抱へ切れぬ程にて行くさまは、何んたる不恰好ぞ、その平気、無邪気、無作法、人の嘲笑を意に介せず、友人の三崎宗玄（嘯輔）とはいかなる不合性にや、いつも反目、互に円滑ならず、洋書及び翻訳講究の始まりし頃、或時宗玄は橋本に向ひ、取り調べたき事あれば、何々の書を貸し玉へといへば、いつがな事に托して見せず、その意地の悪き、宗玄も学問に熱心なるが故に、平生を忘れて頼むに至りしが、ここにいよいよ快よからず、大に感情を害せり、さて橋本より三崎に物を頼む事ありしが、三崎も争でか之が請求に必ずべきや、兎角事によせてその書物を見せざりければ、橋本大に立腹し、平生の敵討をする歟と叫ぶ、三崎は恬然として左に非ず、今は写しかけにして貸すことは能ざるに、去りとは無礼の言状かなと諄々警告す、橋本押し強くも之を借り得むものと、外間も恥も構はばこそ、貸すまで座を立たざりける、宗玄も此の根強きに呆れて、終には貸し与ふるに至る、傍人笑つて曰く、その熱心なる日

比のことも打ち忘れて、我思ふ事を貫徹す、総て此の類なりと」

これは明治44年の山本匡輔の回顧談⁽⁵³⁾の一節である。山本の回顧の対象は橋本綱常であり、橋本視点であるという点を差し引くにしても、極めて貴重な証言である。三崎の訳著書の化学史的価値や、大阪舎密局における役割等は近年の研究でずいぶん明らかにされてきたが、三崎の性格に関する解説は皆無である。この証言は筆者が知るかぎり、三崎の人柄を示すほぼ唯一の史料ではあるまいか。橋本と三崎は互いをライバル視するあまり、ずいぶん仲が悪かったようだ。三崎の負けん気の強さが如実に表れていると言っているだろう。もっとも、ケンカをしたと言っても、橋本が「なぜ、俺に本を貸してくれないのか。前に自分が本を貸さなかったことに対して仕返しをする気か」と感情的に怒鳴るのに対して、三崎が「その言い方は無礼ではないか。単に私が写本を終わっていないから、本を貸せないだけである」と懇々と諭すなど、三崎の方が冷静である。さらに、本の貸し借り争いで、三崎は結局は根負けして橋本に負けてやったこともあるようだから、三崎の方が大人の対応をしていると言えるだろう。

三崎は長崎でボードウィンにオランダ医学を学ぶかわら、英学修行にも励んだ。同じ福井藩留学組の日下部太郎（当時名は八木八十八）が何礼之の英学塾に入り英語を学んでいた。三崎は日下部と親しく交流していたという。伝記『日下部太郎』⁽⁵⁴⁾は、「日下部君が（何礼之の英学塾に）入塾していた」とのみ記し、三崎についてははっきりと言及していないが、「三崎宗玄は蘭学の外に英語の稽古にも熱心で日下部君とは尤も懇意に交はり相互に往復を重ねていた」との回顧談があるので、三崎も日下部とともに何礼之の塾に所属していたと考えてよい。

長崎出身の何礼之（1840-1923）は若くして清語をマスターし、英華・華英字典を長崎在留の唐人から得て、中国語を介して英語を習得した。この辞書とは、ロバート・モリソンが編纂した『五車韻府』という中・英文辞書である⁽⁵⁵⁾。何礼之は文久3年（1863年）長崎奉行支配定役格を申付けられたのち、奉行所の英語稽古所で幕臣や諸藩の学生の英語教育にあたった。元治元年（1864年）には私塾を開いた。塾のカリキュラムについては不明な点が多いらしいが、学生数が300余名にも達するほどの規模にまでなった⁽⁵⁶⁾。何礼之自身は、かなりの歴史通でないと承知しない知名度の洋学者だが、長崎時代の弟子には前島密⁽⁵⁷⁾や陸奥宗光といった著名人がいる。慶應3年（1867年）何礼之は幕府の開成所教授並となったが、江戸でも英学教育を行い、ここからは明治の怪物的政治家・星亨などの人材が育っている⁽⁵⁸⁾。なお、大久保利謙氏は何礼之が江戸の開成所に引き抜かれたことによって、何の長崎の英学塾は自然閉鎖になったと推察している⁽⁵⁹⁾。

何礼之はその優れた見識を買われ、幕府崩壊後は明治新政府にも登用された。明治24年には貴族院勅選議員にまでなっている。経歴からして興味が尽きない人材であるが、ここで取り上げたいのは何礼之と、三崎・日下部ら福井藩士との交流である。残念ながら、「何礼之文書」の幕末期の「公私日録」(≡日記)は文久2～4年と慶應3年7月および慶應4年1～5月の期間があるだけで、三崎の長崎留学中の元治2年～慶應3年初頭の時期の日録を欠く⁽⁶⁰⁾。同じく「何礼之文書」の「履歴」には長崎英学塾時の塾生名簿があるが、薩摩、加賀、土佐、肥前、阿波、筑前の諸藩士の実名の外は「其他熊本久留米、柳川松前等ノ諸藩及地役人子弟併セテ塾生百数十名塾外生二百名ヲ算ス」と“その他大勢”としてまとめられているだけである⁽⁶¹⁾。結論から言えば、筆者は「何礼之文書」から、三崎と何礼之との師弟関係を証明するに至っていない。

さて、長崎精得館で医学を教授していたボードウィンは、医学の基礎である物理学と化学部門を精得館から切り離し、別組織で教育を行うことを提言した。その結果、慶應元年（1865年）10月に完成したのが分析究理所である⁽⁶²⁾。なお、当時の言葉で「分析」は化学、「究理」は物理学を意味する⁽⁶³⁾。

分析究理所が開校したのは、三崎ら福井藩士が長崎に到着した約半年後である。そして、三崎は長崎留学開始から約1年後の慶應2年4月に、藩より舎密術(=化学)習得を命じられた。この4月の時点をもって三崎は分析究理所に移籍したのか、既に分析究理所に出入りして化学を学び始めたのちに藩当局から正式に承認を受けたものなのか、分析究理所に所属後は医学修行を完全に放棄して

しまったのか、何礼之の塾での英語稽古は同時並行で行われたかなどなど、それらの点は全て不明と言わざるをえない。

ボードウインの元に派遣された複数の藩士の中から、名門医師の家の子息である三崎をとくに選んで、藩当局が「お前は医学ではなく化学をやれ」と一方的に命令したとは考えにくい。化学を志したのは本人の強い意志があったにちがいない。三崎が医学から化学に転向した理由について、管見の限りでは、三崎自身の口で語られた史料に心当たりがない。当時、医学内の一部門とされていた化学を学ぶうちに、本来の医学以上の関心を持ったと考えるのが素直な解釈だろう。また、三崎が江戸の蕃書調所で蘭学を学んでいた文久元年～2年、福井藩に籍を置いていた市川斎宮（1818-1899）は同所の教授手伝で、精錬学の教授も兼ねていた⁽⁶⁴⁾。三崎は江戸遊学時に市川から化学の基礎を学び、長崎留学前から化学に強い興味を持っていた可能性もある（市川については後の章で詳述）。さらに、長崎滞在中に仲がよろしくない橋本綱常とは医学の世界では勝負にならぬ、別の道を歩みたいと見切りをつけたとの推測も可能だが、さすがにこれは小説家的空想の域を超えない。

分析究理所の理化学専門教師として招かれたのがⅡ章で述べた蘭人化学者のハラタマである。ハラタマは慶應2年（1866年）3月3日に長崎に到着した。三崎から見て、ハラタマとの運命の出会いである。ハラタマの化学教育は一般講義もさることながら、実験教育を重視した⁽⁶⁵⁾。三崎もハラタマの指導のもと化学実験に勤しんだはずだ。松平文庫「士族」によれば、この年の7月、三崎は藩当局より翌年の秋まで長崎での化学修行を改めて命ぜられた。もっとも、ほぼ同時期にハラタマはボードウインとともに一時長崎を離れ、江戸に向かっている。分析究理所の江戸移管に関する幕府との内談の結果であったと考えられている⁽⁶⁶⁾。

④会津戦争に参加

ハラタマの元に、分析究理所を江戸の開成所内に移転させることが知らされたのは慶應2年（1866年）11月6日である。長崎に戻っていたハラタマは、慶應3年1月、三崎や佐藤道碩、戸塚静伯らを連れ、英国汽船で江戸に向かった⁽⁶⁷⁾。松平文庫「士族」にある「医術修行長崎表ニ罷在候処師匠江戸表江罷出候ニ付同道出府」の「師匠」とはもちろんハラタマのことである。なお、「医術修行」という表現から留学目的が化学から医学に戻っていると一見取れるが、江戸後期以降、化学は医学の基礎科学、つまりその関連分野とされていた⁽⁶⁸⁾。この点については松平文庫「士族」の記述にあまり深くこだわる必要はあるまい。

ハラタマの念願実って、慶應3年（1867年）4月、江戸の開成所内に理化学の学舎が完成した。実は慶應元年（1865年）の段階で開成所内に化学所が設けられ、一応の化学教育設備が整えられていたが、長崎の分析究理所に質量ともに遠く及ばなかった⁽⁶⁹⁾。よって、今回新しく建設された学舎に対し、ハラタマはそれなりの満足感を抱いていたであろうが、まもなく肝心要の幕府が同年10月に瓦解。結局、建物が完成したにもかかわらず、ハラタマが開成所で講義をすることは叶わなかった。

ハラタマとともに江戸にいた三崎は幕府崩壊前後どうしていたか。三崎は慶應3年9月に福井に戻り、10月藩公の奥医師雇就任を命ぜられている。名門医家の生まれとして相応のポジションに到達したことを三崎は喜んだのか、それとも化学の道からやや逸れつつあることに嘆息したのか。それは本人のみぞ知ることである。三崎は奥医師雇に任命された後、すぐに江戸に出立し、翌年2月にまた福井に戻っている。山本匡輔の回顧談⁽⁷⁰⁾にある「（この頃の三崎は）江戸福井間を往復すること数回」とはこのことを指すのだろう。なお、この時期の江戸と福井の往来に関しては、松平文庫「士族」と『稿本神陵史』の記述の間にほぼ矛盾がなく、史実としてよいだろう。

慶應3年10月といえば大政奉還があった時期である。幕末土壇場の政局風雲を告げる中、三崎は江戸に向かったわけだ。江戸に残してきた師のハラタマや理化学学校が心配になって、藩の許可を得て駆けつけたとするのが無難な推測か。それとも、長崎留学時代に得た諸藩士や幕臣たちとの三崎の人脈を利用して政局の情報収集にあたらせるといふ藩当局の含みがあったと想像を逞しくすることも可能か。ここは種々想像の翼を拡げたいところだが、一次史料に基づかない憶測は控えておこう。

確実なのは、慶應4年（1868年）5月22日に養父宗仙が死去し、三崎は同年6月20日に家督を相続したわけだが、慶應4年2月に三崎が江戸から福井に戻ってきたのは、養父の重病を聞いて慌てて帰ってきたわけではないということだ。なぜなら、松平文庫「士族」の記録によると、養父宗仙は慶應3年9月に京都へ出立し、慶應4年3月に帰藩しているからである。

三崎は帰国して家督相続後すぐに奥医師を仰せつけられた。家督を相続した以上、当分は、三崎は本来の家業である医師としての勤めを余儀なくされることとなる。慶應4年6月25日、三崎は会津戦線へ向けて福井を発つ。福井藩兵は薩長軍とともに同年7月に越後長岡を攻略した後、阿賀川に沿って会津若松城を目指した。会津藩側も一瀬要人を総督とし、猛将・佐川官兵衛らが率いる諸中隊よりなる越後方面軍を編成して防衛にあたっており、国境付近で激戦となっている⁽⁷¹⁾。この時、福井藩は動病院と不動病院の2種の陣中医療機関を設けていた。「動病院」「不動病院」とはあまり聞きなれない単語だが、前者は隊と共に進退する野戦病院に類するもので、後者は越後柏崎に占拠したものである⁽⁷²⁾。不動病院長には橋本3兄弟次男の綱維が就任し、前線より送られてくる負傷者の治療にあたっていた⁽⁷³⁾。

三崎が着任したのは会津五泉口である。長崎留学仲間の半井元端が会津五泉口の動病院長となり、三崎や浅野恭斎などがここで軍医としての任務を果たした⁽⁷⁴⁾。同じく越後方面には学友でありライバルでもある橋本綱常が越後病院長として赴任しており、三崎と橋本が現地で顔を合わせる機会はあったと思われるが、取り立てて話は伝わっていない。のち、三崎は柏崎の不動病院に転じ、政府医員に任命されたという⁽⁷⁵⁾。石橋栄達氏が紹介した「9月27日（三崎は）天朝御雇御医師となる」⁽⁷⁶⁾とはこの政府医員任命のことのようだが、この人事履歴は松平文庫「士族」上には現れない。素直に従うなら三崎は福井藩士として出征しながら新政府軍のポストに就いたことになる。この点は、今後裏付け調査が必要となる部分であろう。

明治元年（1868年）9月22日（注、9月8日に慶應から明治に改元。厳密には後に1月1日にさかのぼって新元号を適用している）に最後まで薩長軍に抵抗していた会津が落城し、東北方面の戦線はおおよそ沈静化した⁽⁷⁷⁾。三崎は11月23日に福井に帰藩している。

Ⅵ. 大阪舎密局時代前後の三崎嘯輔

徳川政権が倒れたため、幕府が開成所内に設立していた理化学専門の教育機関も自然消滅した。この時、化学教師のハラタマと幕府との雇用契約期間は数年を残していた。江戸を占領した明治新政府はハラタマの契約を引き継ぐとともに、慶應4年（1868年）6月、大阪府知事後藤象二郎や参与小松帯刀らの建言を受け入れ、7月に開成所の理化学学校を大阪に移すことに決定する⁽⁷⁸⁾。この時点で日本化学史に大きな足跡を残す大阪舎密局の建設計画が成ったわけである。では、なぜ新政府は江戸に学舎が完成していた理化学学校を、わざわざ大阪に移転させたのだろうか？それについては、以下のような理由が考えられている。1）当時、東北地方には親幕諸藩が控えており、いつ江戸が戦火に見舞われるか不安があった、2）徳川幕府時代に、江戸とは別に大阪にも開成所を置き、西日本の高等教育機関とする計画があった、3）大久保利通が大阪遷都論を唱えていた、4）大阪で発足する造幣寮や兵学寮の教育に理化学が必要と考えられた、などなどである⁽⁷⁹⁾。大阪に舎密局建設が決定したのち、江戸にいたハラタマは大阪へ向かった。ハラタマが大阪に到着した月日ははっきりとはわかっていないようだが、だいたい慶應4年の夏頃と考えられている。

幕府崩壊直後の三崎の動向に関する従来の知見は一部訂正されなくてはなるまい。まず、大阪舎密局関連の論文を多く書いている芝哲夫氏は「ハラタマは三崎嘯輔や田中芳男を伴って大阪に到着した」⁽⁸⁰⁾とする。だが、舎密局関連の論文で頻繁に引用される田中芳男旧蔵図書「舎密局創立之起源并爾来之記録」⁽⁸¹⁾には「（ハラタマが江戸から大阪に移った）此時、開成所中之学生教輩并ニ御用掛り田中芳男尾州之人、教頭ハラタマに従ひ大阪に至る」とあるだけで、「学生教輩」に三崎が含まれているとは明言されていない。前述のとおり、三崎は慶應4年2月に福井に帰藩し、家督を相続したあと、同年6月25日に越後に出征している。ハラタマの大阪到着日がはっきりしていない以上、ハラ

タマの江戸から大阪への移動に同行した後、すぐに福井に戻って、会津戦争に赴くというのは物理的に100%不可能とまではいえないが、日程が苦しい。この時点では、三崎はハラタマと行動を共にしていないと考える方が自然である。

つぎに、藤田英夫氏は「杉田定一文書」を調査した池内啓氏の論文⁽⁸²⁾を引用して、明治元年（＝慶應4年）の段階で三崎が東京下谷に私塾を開いていたとの見解を採る。しかし、同年の三崎は2月に福井に戻った後、6～11月下旬まで出征し、戦争終結後はすぐに藩命で大阪に向かっている（後述）。となると、明治元年に東京で塾を開く時間的余裕はなさそうだ⁽⁸³⁾。三崎の東京での私塾運営は大阪退去後の明治4年以降と考えるべきであろう。

①舎密局の大助教となる

大阪舎密局は京都大学の源流⁽⁸⁴⁾とされていることもあって、化学者の関心を引く存在であるため多くの論文が発表されている。本稿は舎密局そのものの概説は既存の文献に譲り、上記の従来の知見を一部修正しつつ、大阪舎密局時代の三崎の動向についてのみ書き記していこう。

大阪府指導のもと、舎密局は明治元年10月8日起工、11月18日には上棟の運びとなった。松平文庫「藩医」によれば11月25日、会津戦線より帰国して僅か2日後、三崎は福井藩より大阪府出仕を命じられた。『稿本神陵史』は、三崎は出征中に大阪府出仕を突然命じられたと記す。たしかに帰藩後すぐに大阪行きを仰せつかっていることを考えると、『稿本神陵史』の記述は説得力がある。

三崎の大阪赴任は福井藩の独自の判断というよりは、「福井藩三崎嘯輔を呼んで教授の職に充たしむ」⁽⁸⁵⁾とあるように、舎密局側より要請を受けて派遣された、と表現する方が正しいだろう。なお、大阪赴任後、『官版明治月刊』（巻之四、明治元年12月発行）で「舎密学を興すの記」が発表されており、その文章は田中芳男の草案に三崎が修正・校正を施したものである⁽⁸⁶⁾。このような業務をこなしつつ、三崎は上阪後に師のハラタマとともに薬品類の整理に没頭した。幕末の長崎の分析究理所時代にハラタマが注文した実験器具や薬品類は、ハラタマとともに江戸経由で大阪に持ち込まれたが、破損・腐敗が酷くすぐに実用には耐えなかったからである。三崎とハラタマは数百に及ぶ薬品類を定性試験によって名称を確定させた。ハラタマという師の元での作業とはいえ、三崎が机上の知識だけでなく、実験化学の実力も備わっていることを示す事実といえよう。この間の明治2年（1869年）2月に、三崎は名を宗玄から嘯輔と改めた。

さて、舎密局は起工後に当事者であるはずの大阪府が消極的な姿勢に転じるなど、御用掛の田中芳男らは苦労を余儀なくされたが、ともかくも明治2年3月に完工となった⁽⁸⁷⁾。発足した舎密局の教頭はハラタマ、三崎は助教である。三崎の職務担当は格致学、化学、講述、訳述である⁽⁸⁸⁾。三崎は専門の化学教師とともに通訳としての役割も求められていたことがわかる。三崎の語学能力の高さを示している証拠と言えよう。実際にハラタマの講義の通訳にあたったのは三崎である。ちなみに、舎密局におけるハラタマの講義内容は『理化新説』という刊本として残っている。

明治2年（1869年）5月1日、大阪舎密局開講式が行われた。ハラタマが講演をし、三崎が通訳して聴衆に聞かせた。この開講式には日本の政府高官も多数出席していたようだが、講演に出てきた“マグネシウム”“アルシメテス（＝アルキメデス）”“有機化学”等の専門用語にはチンプンカンプンだった出席者も少なくなかったはずだ。この時のハラタマの講演は「舎密局開講之説」⁽⁸⁹⁾として発刊された。開講式後の祝宴には長崎遊学時代の旧師のボードウィンや何礼之も出席した⁽⁹⁰⁾。当然、三崎は2人の旧師と記念式典の場で会ったはずであるが、取り立ててエピソードは伝わっていない。

舎密局発足により、三崎は化学者としての人生を本格的に歩み始める。この時点で、現在で言うところの医学とは縁が切れたとしてよいと思う。三崎は舎密局時代に『試薬用法』全2巻（明治3年）を出版した。越前の杉田定一（のち衆議院議長）が三崎を頼って上阪し、化学を学んだのもこの頃である。

舎密局の講義は化学、物理学の座学のほか、高度な実験も行われた。このように意気揚々と船出した舎密局であったが、肝心の化学教育は順風満帆とは言えなかったようだ。「朝十時より理化総論之

講述を始め、三崎嘯輔之を宣訳すと雖ども、未だ入学之生徒少く、教頭之講述徒に馬耳東風とならん」⁽⁹¹⁾といった様相だったらしい。“馬耳東風”とはなかなか厳しい。三崎の通訳が初学者フレンドリーではなかったのか、そもそも講義内容が高度すぎたのか、いずれであろうか。もっとも生徒は当初4名にすぎなかったが、やがて100人を越える規模になった。

明治3年3月、舎密局は大学管轄となり、三崎は大助教に任ぜられた⁽⁹²⁾。このあと、三崎は東京出張を命じられ、大学南校に出勤し意見を具申し5月に帰阪している。組織改編に伴う業務だったようだ⁽⁹³⁾。なお、松平文庫「士族」は舎密局発足当初から三崎が大助教だったかのように記しているが、『稿本神陵史』が記す通り、この時点で大助教となったとする方が正しいと思われる。舎密局が大学管轄となったほぼ時期に御用掛の田中芳男らは「舎密局は化学のほか他の理学も講究しているので、舎密局という名称は不適切である」との意見書を提出した。この意見書は取り上げられ、5月26日に東京から「今後は理学校と名称を改めるべし」との達示があった⁽⁹⁴⁾。理学校へ名称改称後も三崎の担当は格致学、化学、講述、訳述とされている。

しかし、その僅か半年後の10月には、理学校は洋学校が設置されていた開成所へ移行し、その分局となった。その後の正式名称は開成所分局理学所である。この時、田中は辞任し東京へ去る。同年12月にはハラタマは契約期間満了によって、オランダへ帰国した。三崎もまた明治4年(1871年)1月に離任した⁽⁹⁵⁾。これにより舎密局設立の主要メンバーはほとんどが大阪から離れることとなった。その後、開成所は種々の変遷をたどるが、結局明治5年7月をもって舎密局以来の理化学専門教育は終焉を迎えることとなった。

④グリフィスと三崎の交流はあったのか？

藤田英夫氏は、三崎が明治4年初頭に大阪を去った後、福井に戻り、藩校の明新館で理化学やドイツ語を教えたとしている。そして、その傍ら、福井藩のお雇い外国人で化学教師であったW.E.グリフィス(1843-1928)と交流し、ドイツ語やドイツ有機化学を輪読したと断定している⁽⁹⁶⁾。小川明氏も藤田氏の見解をほぼ踏襲している⁽⁹⁷⁾。

アメリカ人のグリフィスは明治4年福井藩に雇用され、福井藩士に化学、物理、各種外国語を教え、日本最初の米国式理科実験室を設立した。有名な昆虫学者の佐々木忠次郎は、グリフィスの福井時代の弟子にあたる。グリフィスは廃藩置県のと、明治5年南校(現在の東京大学理学部や法学部の前身)に移った。教育者として多くの人材を育てたほか、帰国後に日本文化をアメリカに紹介した業績も特筆される知日派である。

藤田氏の主張の根拠は『グリフィス日記』⁽⁹⁸⁾である。たしかに『グリフィス日記』には明治4年5月～年末にかけて、「(グリフィスが)三崎とドイツ化学を読んだ」等の記述が散見される。福井滞在中の『グリフィス日記』を翻訳したグリフィス研究家の山下英一氏も「三崎とは三崎宗玄(嘯輔)のこと」と注釈をつけている⁽⁹⁹⁾。

ところが、福井県の歴史研究者および福井大学の関係者は、「三崎がグリフィスと明治4年に福井で直接交流していた証拠はない」との考えを持っている。では、『グリフィス日記』に登場する“三崎”とは何者か？それは、嘯輔と同じ一族の三崎玉枝だということである⁽¹⁰⁰⁾。玉枝は明治23年に39歳で亡くなっているから⁽¹⁰¹⁾、嘯輔より5歳ほど年少ということになる。藤田氏や小川氏の見解は『グリフィス日記』内の“三崎”が三崎嘯輔であることを前提に組み立てられているので、それが三崎玉枝だとすれば彼らの解釈は完全に崩壊することになる。

筆者も最近、三崎嘯輔が明治4年に福井に戻って明新館で教鞭をとり、グリフィスと交流したという藤田氏らの見解に疑義を持つようになった。それは、松平文庫「士族」にある「(明治三年)十月三日山県三郎返上屋敷内ニ而式百六十九坪坪地被下候」と「同四年三月十三日昨年坪地被下置候処他国留守、且家作等も出来兼候ニ付是迄之通子安丁ニ当分其僱居住仕度旨、願之通被仰付候但坪地之儀ハ可致返上事」との記述である。藩士の家屋敷を再編していた福井藩当局は約270坪の屋敷を三崎に割り当てた。なお、ここで出てきた山県三郎とはV章②で述べた禁門の変の際に越前藩の軍勢を率いた

山県三郎兵衛の養子で、家老クラスの藩士である。

松平文庫「士族」は明治4年3月、三崎に対して「他国留守」, ようするに福井に不在なのであれば「拝地之儀ハ可致返上事」, 住まないなら屋敷を返せと藩当局が指示したことを示している。三崎への屋敷返上指示は明治4年3月13日で、一方『グリフィス日記』に“Misaki”なる人物が登場するのは同年5月8日である。一見両者には約2か月のズレがあるように見えるが、『グリフィス日記』の日付は太陽暦なので⁽¹⁰²⁾, 実際はこの2つの日はほぼ同時期である。『グリフィス日記』に“Misaki”が登場する時期に、福井藩当局が「お前は福井にいないじゃないか」と三崎嘯輔に指摘している事実は極めて重いと言わねばなるまい。

そもそも、松平文庫「士族」の三崎の履歴に明新館関連の記述がないことは、三崎＝明新館教師説の大きな弱点である。たとえば、グリフィスの警護役を勤め、彼と行動を共にすることが多かった井上穆の履歴には、明新館という単語およびそれと関連した役職名がちゃんと記録されているのだ。「士族」の全福井藩士の履歴から、明治以降の明新館関連の記録がすっかり抜け落ちている事実はない。

以上、まとめると松平文庫「士族」は、三崎嘯輔が大阪から福井に戻って教鞭をとった可能性が極めて小さいことを示している。また、仮に三崎が明新館で教鞭をとったとすれば、三崎が乗った船の名前まで記している『稿本神陵史』が、その重要な経歴について全く触れていないのも不可解だ。筆者は、次章で述べるように、三崎は大阪理学校辞職後、福井藩に戻ることなく速やかに上京したとの説を採用する。

VII. 大学東校時代の三崎嘯輔

三崎は明治4年(1871年)1月に大阪の理学所を辞職したのち上京した。そして、大学東校(東京大学医学部の前身)の化学教師として教壇に立つこととなる。また、東京下谷に私塾を開いてドイツ語や化学を教えた。その詳細については不明な点が多いが、私塾を開いていたこと自体は注釈(83)で述べた「杉田定一関係文書」や、明治6年刊行『新式近世化学』⁽¹⁰³⁾の中で三崎の弟子の辻岡精輔が書いた序説にある「一昨冬為ニ私塾ヲ開キ独逸理学ヲ教フ」との記述からたしかと言える。しかも、辻岡の序説から私塾発足が明治4年冬であることがわかるのである。本章では三崎の人生の最終章ともいべき大学東校時代の履歴を追跡することとする。

①東京大学に保管されている三崎嘯輔関連の一次史料

筆者が東京大学総合図書館で調査した大学東校(のち、東校、第一大学区医学校)時代の三崎関連の一次史料名5個と、そこに記された三崎の記述箇所の抜粋は以下の通りである。

「明治二年職員録」

大学東校附病院 下谷ニアリ

大助教 理学化学教授 従七位 三崎尚之

「医学校職員 明治四年」

辛未七月廿七日 任文部大助教

三崎嘯輔

「明治四年正月 諸願届書留」

三崎大助教

所労届 十二月七日

「職務進退 明治四年」

等外一等出仕申付候事

辛未 十二月廿四日
大助教 三崎尚之

文部少教授 三崎尚之
東校予科教場専務被仰付候事
壬申 正月十一日

「職務進退 明治五年中」
文部省六等出仕被仰付候事
正七位 三崎嘯
壬申 九月十四日

私事で恐縮であるが、三崎の史料を発掘せんと意気揚々と東大図書館を訪問したものの、率直なところがっかりしたと言ったところだ。東京大学総合図書館参考調査係の方の話では、『東京帝国大学五十年史』⁽¹⁰⁴⁾『東京大学百年史』⁽¹⁰⁵⁾の編集の際に利用された大学東校時代の史料は、ほぼ全てが東京大学総合図書館で保管されているとのことである。ということは、東大図書館で三崎の史料をいくら探索しても、『東京帝国大学五十年史』『東京大学百年史』に掲載されたこと以外の知見はなかなか得られないのはある意味当然だ。あえて今回新しく判明した点といえば、明治4年12月に三崎が所労届（＝休暇願）を出したことぐらいである（新事実と呼ぶには大層だ）。

大学東校について簡単に解説しておこう。明治新政府は江戸を占領したのち、幕府の学問諸機関を接收した。明治2年（1869年）6月、政府は昌平学校を大学校と改め、開成学校と医学校をその分局とした。さらに同年12月17日に開成学校と医学校をそれぞれ改称したのが大学南校と大学東校である⁽¹⁰⁶⁾。

東京大学総合図書館に保管されている「明治二年職員録」を見れば、明治2年年末の大学東校発足時に三崎は大助教だったことになり、これは従来の三崎の履歴の知見を大きく覆す史料のように一見思える。しかし、『東京大学百年史』⁽¹⁰⁷⁾は、「明治二年職員録」の人事記録を「明治四年三月以降のものと思われる」として単純に採用していない。三崎に関して言えば、明治2年当時大阪舎密局に奉職しながら、大学東校の教員を兼ねたというのはどう考えても無理がある。本稿では『東京大学百年史』の見解に従う。

「明治二年職員録」の用紙には“東京大学”という文字が印字してあった。どうやら現存する「明治二年職員録」は、明治10～19年の官立東京大学の時代に筆写されたもので、その時に年代が取り違えられたらしい。“下谷ニアリ”⁽¹⁰⁸⁾との朱字による注釈も筆写時に書き加えられた可能性がある。

②大学東校における三崎嘯輔

大学東校における教育カリキュラムは史料が十分に残されていないようで、三崎がいかなる科目を担当していたかは不明である。よって、以下、大学東校における三崎の人事履歴を中心として追跡してみた。

明治4年（1871年）1月15日、三崎は大阪の開成所を御用済みとなったのち、同月29日には神戸を米国飛脚船で出航し、横浜に向かいただちに上京した⁽¹⁰⁹⁾。『稿本神陵史』は三崎の帰京を命じられたものであって、本人の自由意思ではないとする。もちろん、何かしらの人脈による抜擢人事と考えることも可能だ。その場合はいくつか可能性を列記することができよう。まずは、三崎よりも一足先に帰京していた田中芳男。つぎに、佐倉の順天堂で佐藤尚中に学び⁽¹¹⁰⁾、大学東校の前身である医学校の少丞（のち権大丞）になっていた福井藩出身の岩佐純（1835-1912）。さらに、同じく医学校の中博士⁽¹¹¹⁾で、三崎が幕末の江戸で師事していたと思われる大鳥圭介の師である坪井為春などなど。三崎が幕末以来築いていた洋学系の人脈がここで生きたのかもしれない。

「医学校職員 明治四年」によれば、三崎が文部大助教に任命されたのが明治4年7月27日、文部省設置の太政官布告がなされたのが同年7月18日である。この時、大学東校は大学の廃止に伴い文部省所管となっており、三崎は同省所属の職員とされたということになる。三崎の「理学化学教授大助教」とはこの頃の肩書である。なお、大学東校は東校と名称を改めた。

当時の学生たちは教育レベル、年齢ともまちまちであり⁽¹¹²⁾、教える側の三崎もその点は苦勞したことは想像に難くない。明治4年12月、東校のカリキュラム改革が行われた。大雑把に言えば、予備教育を充実させるため、教育課程を本科と予科に明確に分課したのである。三崎は予科担当（東校予科教場専務）とされ、これと相前後して少教授になった。明治5年（1872年）には正七位に昇進し、文部省六等出仕（9月14日付）という人事記録を見ることができるが、これ以降の東校における三崎関連の一次史料を筆者は見いだせていない。なお『稿本神陵史』は三崎を文部七等出仕と記すが、ここは東校の一次史料に従い、六等出仕としておきたい。

同じく『稿本神陵史』によれば明治5年夏に親の大病により一時福井に戻っている。その後、東京に戻った後、9月には石炭油試験御用にて横浜に出張するなどの勤務ぶりを示している。

③明治天皇の行幸

明治天皇は明治5年（1873年）3月13日に東校、ついで同月29日に南校に行幸した⁽¹¹³⁾。この行幸時に三崎は直垂、たすき掛けの出で立ちで化学実験と講義を行ったという話が伝わっているが、筆者の知る限りこの逸話を掲載しているのは『朝日本歴史人物事典』⁽¹¹⁴⁾だけだ。これがいかなる史料を基に書かれているのかは定かでない。それに、あくまで「伝わっている」というレベルの話であり、現段階では史実と断定はできていないようである。

長崎時代の三崎と推定される写真は洋装だが、大阪舎密局時代の写真は和装である。三崎は洋服よりも和服を好んだのであろうか？筆者はこのユーモラスな実験風景を一次史料で裏付けすることを試みた。『明治天皇紀』⁽¹¹⁵⁾によれば、明治天皇は朝9時に出門し、東校に到着したのち「授業及び器械等を天覧」「診察所並びに各室執務の状を御巡覧」、次に文部省を訪問し各種陳列品を天覧した後、午後1時には御所に戻っている。なかなかの“駆け足”行幸である。ドイツ人化学教師らには勅語を賜ったが、三崎ほか日本人教師の固有名詞は『明治天皇紀』には記されていない。つまり、三崎が直垂で化学実験したという逸話は『明治天皇紀』では裏が取れない。

東京大学総合図書館には「南校『含要類纂』卷之 三十三 本省往復之部」という文書が保管されている。これには、先に明治天皇が行幸した東校が南校へ送付した書類があって、行幸当日の東校職員の行動手順が書き記されている。ようするに先に明治天皇を迎えた東校側が「明治天皇を迎えるにあたって参考にしてくれ」という示唆を南校に与えたものと思われるが、残念ながら行幸の際の化学実験については全く触れられていないのである。

『明治天皇紀』によれば、東校行幸の際、明治天皇は、三条実美、西郷隆盛、大隈重信、板垣退助、徳大寺実則らを従え、また大木喬任以下勅奏任官の拝礼を受けている。いずれも錚々たる顔ぶれである。彼らの残した書簡や日記等を調べることで、公式文書に残っていない明治天皇の行幸の様子が一部解明できる可能性はあるが⁽¹¹⁶⁾、とりあえずは手元にある史料で東校への行幸を今一度検討してみよう。

3月29日の南校への行幸に関しては、『明治天皇紀』は教師陣の固有名詞ほか行われた講義名まで詳細に記録している。また、天皇が実験を見学したことも明記されている。対して、『明治天皇紀』の東校への行幸の様子の記述はより簡略であるが、これは史料的制約というよりは、そもそも天皇が東校に滞在した時間が短かったからではないか。上述のとおり、3月13日、明治天皇は朝9時に出て、東校と文部省の両方を訪問した後、午後1時には御所に帰還している。一方、南校行幸の日は、同じく朝9時に御所を発ち、南校に臨幸、午後2時半に還幸している。

ここで、『明治天皇紀』編集の際の参考資料となった『行幸録』⁽¹¹⁷⁾を閲覧してみた。当然のことながら、『行幸録』の記録は『明治天皇紀』の記述の枠組みを大きく超えるものではなかった。『行幸録』

には3月13日の東校行幸の経過として「御出門先ツ東校へ至ラセラレ生徒教授向及ヒ其諸器械天覧次に診察所へ臨御諸器械等天覧」とある。つまり、天皇は器械を見学したとあるが、実験に立ち会ったとは一言も書いていない。さらに、極言すれば天皇の行幸の当日、三崎が東校に居合わせたことすら『行幸録』では確認できないのである。

『朝日本歴史人物事典』で三崎の項の執筆を担当したのは、科学史を専門とする村上陽一郎氏である。村上氏は該当分野の研究業績が多く、決していい加減な事を書く人ではない。村上氏がどのような史料に基づいて「三崎が明治天皇に対して直垂、たすき掛けの出で立ちで化学実験と講義を行ったと伝えられる」と記述したのか定かでない以上、筆者としては断定を避けたい。しかし、『行幸録』を見た限りでは、筆者は東校関係者が天皇に実験を披露する時間的余裕はなかったのではないかと推察している。南校での化学実験ないしは全く別のエピソードが、三崎が行った天覧実験として誤伝された可能性を考慮してもよいだろう。

④三崎の死去

残念ながら、三崎にはその優れた才を日本の化学の発展に生かす時間は残されていなかった。明治5年(1874年)8月3日、東校は第一大学区医学校と改称された。三崎は明治6年(1874年)5月11日、「親対面願」により福井に帰省する。養父・三崎宗仙は慶應4年(1868年)に死去しているから、ここでいう親とは実父の宗庵と考えられる。松平文庫は宗庵の逝去年を記していないが、明治6年当時はまだ健在だったようである。

この帰省時に嘯輔は亡養父・宗仙の娘の鈴と結婚するが、すぐに離縁した。そして、同月15日急死した。享年26歳(文末の写真)。大阪舎密局に関する数々の概説文を書いた芝哲夫は「三崎嘯輔の早い死は日本の化学の不運を嘆かざるを得ない」⁽¹¹⁸⁾とその早すぎた死を惜しむが、筆者も全くの同感である。

それにしても三崎の死の前後は不可解な点ばかりだ。なぜ三崎は結婚してすぐに新妻と離縁してしまったのか？また、死因は何なのか？三崎家には死因は肺結核だったとの伝承があるようだが⁽¹¹⁹⁾、あくまで伝承であって確たる証拠はないようである。肺結核であることが判明したから妻を気遣って離縁したと考えたくもなるが、三崎は元々医者である。結婚直前まで自分が肺結核であることに気付かなかったとは考えにくい。

三崎が離縁した鈴は数年のちに再婚しており、その末娘の方が1983年当時健在であった。その人の証言によれば、「外国へ留学したいと言われ、医家を継ぐ一人娘であったので離婚した」「立派な方だったのでお墓を建てた」等の話が伝わっている⁽¹²⁰⁾。宗仙家に養子に入った身としては、ともかくも養家の娘と一度は結婚したという事実を欲したのであろうか？

また、三崎は留学のために第一大学区医学校を辞職して福井に戻って来たのか、それとも在職のまま死去として扱われたのか。東京大学総合図書館に保管される人事記録「明治六年四月迄 職務進退」「明治六年一月ヨリ十二月迄 進退人撰願伺届」には三崎が辞職した、ないしは死去した等の記述はなく、東大の諸史料は三崎の死亡時の身分について黙したままである。三崎の死の前後の謎は未来永劫解けない可能性が高いだろう。

ここまで三崎の生涯を追跡してきた。従来の知見を再検討した結論に加え、三崎が刊行した書籍を含めた履歴(改良版)が表2である。

VIII. 三崎嘯輔が学んだ語学について

三崎が複数の外国語に堪能であったことは疑う余地がない。VIII章では三崎がそれらの外国語をどのように身につけたかを考証することとする。あらかじめお断りしておくが、本章で述べることの多くは確証がなく、可能性を列挙しているだけにすぎないことをあらかじめご了承ください。

表2 三崎嘯輔の略歴（改良版）

元号	西暦	年齢	事項	刊行した化学書
弘化4年	1847年		5月11日福井藩医の三崎宗庵（草庵）の子として生まれる 生誕日は「稿本神陵史」のみが記す。幼名は虎三郎(●)。のち、宗玄、嘯輔、嘯。字は尚之	
文久元年	1861年	14歳	蘭学および英学修行のため江戸に上る。大鳥圭介に師事する（詳細な時期不明）	
文久2年	1862年	15歳	3月、藩より蕃書調所への入門を命じられる	
文久3年	1863年	16歳	藩主夫人の帰藩に同行して、福井に帰郷する	
元治元年	1864年	17歳	禁門の変勃発。三崎は長州勢敗退後に入京し、一か月ほど滞在して警衛にあたる 10月、済世館の句読師に就任する(●)	
元治2年	1865年	18歳	1月、医学修行のため長崎へ留学し、ボードウィンにオランダ医学を学ぶ ボードウィンからオランダ語のヒヤリング能力を身に着けたと考えられる ※長崎滞在中に、何礼之の英学塾に入り英語を学ぶ（詳細な時期は不明）	
慶應2年	1866年	19歳	4月、藩より舎密学（化学）習得を命じられる 長崎に招かれたオランダ人化学者ハラタマに随身し、分析究理所で化学を学ぶ 長崎留学中に三崎宗仙の養子となる(●)	
慶應3年	1867年	20歳	分析究理所を開成所内に移すことに伴い、ハラタマとともに江戸に入る 9月に福井に戻る。10月奥医師雇となるも、すぐに江戸に向かう	
慶應4年 (明治元年)	1868年	21歳	2月福井に戻る。5月、養父の宗仙死去。6月、養父宗仙の家督(150石)を相続する 同じく6月、会津従軍を命じられ、会津五泉口に出征。動病院で負傷者の治療にあたる 柏崎の不動病院に転任。9月、天朝御雇御医師を拝命する(●) 11月、福井に帰藩する 同じく11月、舎密局設立のため、藩主より大阪府出仕を命じられる	
明治2年	1869年	22歳	田中芳男らの尽力で大阪舎密局が完成する。教頭はハラタマ 嘯輔と改名する。舎密局の助教となり、ハラタマの講義の通訳を担当する	
明治3年	1870年	23歳	舎密局が大学管轄となったことにともない、大助教となる (この頃、大阪兵学寮出仕で、日本のドイツ学の祖ともいべき市川兼好と交流する)	『試薬用法』
明治4年	1871年	24歳	開成所（舎密局の後身）から御用済となったのち、上京する 7月、文部大助教になる。東校で理学化学の教授を担当する。 12月26日文部少教授になる(●) 東京の下谷に私塾を開き、ドイツ語および化学を教える	『薬品雑物 試験表』
明治5年	1872年	25歳	1月、東校の予科の東校予科教場専務・少教授に任ぜられる 3月、明治天皇が東校に行幸。その際、直垂・たすきがけで化学実験を行ったと伝えられるが、『明治天皇紀』『行幸録』からは史実として確認できない	『化学器械 図説』
明治6年	1873年	26歳	5月11日、福井に帰省。宗仙の娘・鈴と結婚するがすぐに離縁する(●) 同じく5月15日、病により急死。死因は結核という説がある	『新式近世 化学』
明治7年	1874年			『試験階梯』 『定性試験 樽屋』

(●) は「稿本神陵史」およびそこから引用したと思われる文献にのみ現れる経歴

①オランダ語のヒヤリング能力

江戸時代を通じてオランダ語が読める日本人は決して少なくなかったが、大半は会話が全くダメであった。そもそも、鎖国時代の一般民衆はオランダ語ができる必要性はゼロであったが、江戸時代オランダに対して唯一開かれていた長崎では、オランダ語を話せる人間が必須であった。そのような役割を果たした技能集団がオランダ通詞である。

通詞と呼ばれるこの職業は現代の通訳に近いが、長崎貿易の現場においてある時は翻訳者、ある時は商人、ある時は学者であるといった、現在のプロの通訳と比較すると、当時の通詞ははるかに扱う分野が広がった⁽¹²¹⁾。端的に言えば、彼らには語学にとどまらない幅広い学識が必要とされたのである。とはいえ、幕末に需要が急増した近代科学や医学、軍事学等の翻訳にはインテリの通詞といえどもなかなか対応できなかった。近代学問の用語を通訳する場合、通訳する側にもそれなりの専門的知識が必要だからである。幕末日本は外国語ができる人材不足に悩まされることとなる。

これは化学の分野でも同様であった。では、慶應元年（1865年）に設立された長崎の分析究理所でのハラタマのオランダ語での講義に対し、日本側はどのように対応したのだろうか？ハラタマの書簡によれば、研究室には常に25～40歳の15人程度の日本人学生がいた。彼らのうちオランダ語が読み書きできる者は少なくなかったが、例によって会話には苦しんでいた。講義では学生の一人が通訳を務めたという⁽¹²²⁾。幕末から明治初期の日本近代化学史の多くの概説文を発表している芝哲夫氏は、この一人の学生を三崎であると推定している。芝氏は論文中で「ハラタマの通訳は三崎以外に考えられない」とまで断言していることもあるが⁽¹²³⁾、とくに根拠を示しているわけではない。

明治2年（1869年）5月に開校した大阪舎密局でのハラタマの講義を通訳したのは三崎である。つまり三崎はオランダ語の読み書きだけではなく、どこかの時点でヒヤリング能力を身につけたことは絶対確実なのだが、ではそれをどこでどのようにマスターしたのか？

芝哲夫氏は、幕末の長崎でオランダ医のポンペの医学講義を通訳していた司馬凌海（1839-1879）に習うことで三崎はヒヤリング能力を磨いたのではないかと推測するが⁽¹²⁴⁾、これは明らかに成り立たない。というのも、ポンペは三崎の江戸遊学中の文久2年（1862年）9月に日本を去っているからである⁽¹²⁵⁾。しかも、ポンペが帰国する前年の文久元年6月に、司馬は長崎を去っている。もちろん、司馬が長崎にいなかったからと言って、三崎と司馬との文通による交流は否定できないが、書簡のやり取りではヒヤリング能力は身に着かない。伝記『司馬凌海』⁽¹²⁶⁾は「（司馬は）同僚の妬みで伝習所を除籍になった」とするが、司馬が強情すぎて師のポンペに疎まれたというのがどうやら真相らしい⁽¹²⁷⁾。いずれにせよ、三崎が司馬にオランダ語会話を長崎で習う機会がなかったのはたしかである。

芝哲夫氏の諸論文に書かれた三崎の略伝を読むと、三崎が分析究理所設立の前に蘭医ボードウィンについて学んでいた事実がはっきりと抜けていることがわかる。三崎のオランダ語のヒヤリング能力はボードウィンから医学を学ぶ過程で磨かれたと解釈するのが素直である。

分析究理所で三崎がハラタマの通訳を務めたことはあったであろうが、学生たちは三崎一人に終始頼りっきりだったのかどうか。ボードウィンの前任者のポンペの回想によると、ポンペの学生たちもオランダ語の文法はできたが、ポンペの会話はまったく理解できていなかった。そこで、ポンペはまず学生にできるかぎりオランダ語を勉強するように勧めた。学生らはオランダ海軍派遣隊に加わっていた商船学校の教員にオランダ語を教わった。結局、2、3ヶ月もすると、ポンペがゆっくりと明瞭に話せば、学生たちは聞き取れるようになったし、ポンペの方も長崎の方言まじりの日本語を多少話すようになったという⁽¹²⁸⁾。幕末の長崎には、蘭学、医学、化学、海軍などを学ばんと全国から志ある若者が集まっていた。彼らは俊秀であったし、外国語をマスターしたものも少なくなかった⁽¹²⁹⁾。ハラタマの生徒たちがいつまでも三崎におんぶに抱っこだったと考えるのはやや無理がある。芝氏の指摘は明治初期の大阪舎密局でオランダ語を自由に操れた三崎がハラタマの講義を通訳したとの事実を、幕末長崎にさかのぼって強引に適用している感が否めない。

②三崎は江戸で英語を学んだのか

『福井県議会史』⁽¹³⁰⁾は「杉田定一は三崎嘯助について、英語、ドイツ語を修めた」と記している。素直に読むなら、三崎は東京下谷の私塾で英語を教えていたということになるが、これは三崎の弟子の辻岡精輔の「一昨冬為ニ私塾ヲ開キ独逸理学ヲ教フ」⁽¹³¹⁾との回想と完全には一致しない。杉田を福井出身の偉人として称賛する『福井県議会史』の記述は杉田の伝記⁽¹³²⁾の誤読に基づいているようだ。そもそも、杉田が「英語を修めた」とはお世辞にも言えないことは、のち外遊先のサンフランシスコから妻に宛てた書状の中で「英語ノ出来ザルニハ実ニ困入リ候」と正直に告白していることから明らかである⁽¹³³⁾。

さて、三崎は英語がどの程度できたのだろうか。かつて芝哲夫氏は「(福井藩)明新館における外人雇教師はグリフィス、ワイコフ等英米人のみで占められ、オランダ語、ドイツ語の三崎は不適であったのではないかと述べ、三崎は英語が不得手であったと推測したことがある⁽¹³⁴⁾。一方、近年、和光大学の内田正夫氏は、三崎講述の『新式近世化学』には、G. F. バーカー著の英文化学教科書を参考した形跡があるとし、「三崎は蘭独英三ヶ国を駆使できた」と結論づけている⁽¹³⁵⁾。化学専門書から得られた内田氏の解釈に対し、化学の素人である筆者はどうか論評できる立場にない。しかし、同氏の見解の一部は「グリフィスと三崎は福井で親交を持っていた」ことを根拠に含んでいることだけ指摘しておこう。第Ⅶ章④で述べたように、福井の地で三崎とグリフィスが交流したというのは極めて疑わしいのである。もっとも、三崎が東校の大助教になっているのとはほぼ同時期、グリフィスは南校の化学教師であった。よって、東京在住時に福井に所縁のある二人の化学屋の交流を完全否定することはできないことも付け加えておく。

三崎がオランダ語ほど英語の読み書き会話が自由にできたかどうかは別にして、英語をそれなりに習得していたことは事実であろう。長崎留学時に何礼之について英語を熱心に学んでいたという留学仲間の回想があるからだ⁽¹³⁶⁾。

文久元年(1861年)～3年時の三崎の江戸留学の目的が「蘭学并英学修行為」であったことは第Ⅴ章①で述べた。ここでは三崎が江戸で英語を学んだとすれば、いかなる師の元で修行に励んだ可能性があるかを見ていきたい。

まずは師と思われる大鳥圭介である。大鳥が蘭学に限界を感じ、アメリカ人医師のヘボンについて英語を本格的に習得し始めるのは元治元年(1864年)以降だが、それより以前にも中浜万次郎から少しばかり英語を学んでいた⁽¹³⁷⁾。三崎が師の大鳥から英語を多少かじっていた可能性はあろう。

つぎに三崎の正規の留学先である蕃書調所である。三崎が江戸に入る前年の万延元年(1860年)8月、千村五郎と竹原勇二郎が蕃書調所英学句読教授出役に任命されており、英語が正式科目となっていた。さらに11月には高島太郎が同出役を命ぜられた⁽¹³⁸⁾。また、三崎の江戸滞在中に蕃書調所は英和辞書の『英和对訳珍辞書』(序文は文久2年(1862年)11月付)を刊行している⁽¹³⁹⁾。つまり、三崎は個人的に私塾なんぞに通わなくても、英語に触れる機会を保持していたのである。

さらに、安政6年(1859年)にオランダ語と英語の両方ができる堀達之助が蕃書調所の翻訳方に任ぜられていた。そして、以前に福井藩に招聘され、蕃書調所創設以来のスタッフだった市川斎宮は、この堀と親しかったという⁽¹⁴⁰⁾。市川を介して、三崎が堀に師事できたのかもしれない。

天才・三崎といえども江戸遊学開始時は若干14歳。オランダ語に加え英語習得に多くの時間を割けたかどうかは微妙だ。ここでは可能性の列記ばかりしてしまったが、三崎が英語を学べる環境に身を置いていたことはたしかなのである。長崎時代に何礼之の塾で三崎が英学修行に励めたのは、江戸遊学時に多少なりとも英語に触れていたからだとも考えることも可能である。

③三崎のドイツ学系統の人脈は？

三崎が明治3年(1870年)に刊行した『試薬用法』はドイツのK. R. フレゼニウスの『定性化学分析入門』の翻訳なので、三崎はこの時点でドイツ語に堪能であったはずだという指摘がなされている⁽¹⁴¹⁾。それに対して、三崎が『試薬用法』を執筆するにあたり参考にしたのは、『定性化学分析入門』

のドイツ語原本ではなくオランダ語版であるとの反論がある⁽¹⁴²⁾。この見解の対立に対して、化学の知識がない筆者はどちらの主張に分があるという判定を下す能力はない。どちらの見解が正しいにしても、三崎がドイツ語を解したこと自体は疑いがないようだが、どの段階で三崎がドイツ語を読めるようになったのかは不明のままである。

憶測にすぎないが、学問修行の経過からして、三崎がドイツ語を本格的に学び始めたのは慶應3年の江戸滞在期ないしは明治以降ないしはではないだろうか。明治4年の冬にドイツ語と理化学を教える私塾を東京下谷に開いたことを鑑みると、それ以前の大阪舎密局時代にはドイツ語をそれなりにマスターしていたと考えるべきである。

明治新政府が幕府から接收した西洋医学系教育機関の維新後の最大の課題は、幕末以来のオランダ医学からドイツ医学への転換をはかることにあった。欧米諸国の学問事情についての知識が増えるにつれ、日本が頼りにしてきたオランダ医学の水準が、ドイツ医学に遠く及ばないことが明らかになってきたからである⁽¹⁴³⁾。三崎がドイツ語の習得を目指したのは、こういった時代の流れを敏感に読み取った結果かもしれない。

福井藩関係者でドイツ学系人材と言え、ドイツ医学導入に尽力した岩佐純やドイツ留学組の橋本綱常らがまずは第一人者というべきだろう。しかし、ここでは、三崎が交流を持ったかもしれないドイツ学系人脈を、岩佐と橋本以外の2人を挙げてみたい。もちろん、今のところ三崎が彼らと直接ドイツ学を論じたなどの証拠を見出しているわけではなく、可能性を述べているにすぎないことをご理解願う。

一人目はここまで何回か述べてきた市川兼恭（斎宮）である。市川は文政元年（1818年）に広島藩医の市川文徴の三男として生まれた。大阪の緒方洪庵や江戸の杉田成卿に学び、のち砲術研究の道に入った⁽¹⁴⁴⁾。嘉永3年（1849年）軍制改革を進めていた松平春嶽によって福井藩に招聘され、兵書の訳読に従事した。同年には福井の地を踏み、砲術や砲台建築の議に加わっている⁽¹⁴⁵⁾。ペリー艦隊来襲時には、福井藩の品川御殿山に陣営を築き、海岸に砲台を設置したというから⁽¹⁴⁶⁾、福井藩の軍制との関係は深いものがある。嘉永6年（1853年）に幕府に蕃書和解御用として召しだされた。蕃書調所出役教授手伝に任命されたのは安政3年12月（1856年）である⁽¹⁴⁷⁾。つまり、安政4年（1857年）正月に開校した蕃書調所では発足時からのスタッフだったわけで、同年7月20日時の同所御役人方の手伝一覧に市川の名がある⁽¹⁴⁸⁾。三崎が江戸に上った文久元年（1861年）頃、市川は精練方の教授を兼ねていたことは前述の通りだ。

蕃書調所におけるドイツ語研究は万延元年（1860年）頃に始まっていたらしいが、ドイツ語学科が開設されたのは文久2年（1862年）である。市川は幕府よりドイツ語の習得を命じられた。市川の日記からは文久元年から翌年まで、彼が洋学者たちの交流を重ね、ドイツ語研究に勤しんでいたことがわかる⁽¹⁴⁹⁾。市川とともにドイツ語を研究した加藤弘之の回想⁽¹⁵⁰⁾によれば、プロイセン王国が電信機械を幕府に贈呈し、その使用法伝習を幕府が市川斎宮と加藤に命じたのが端緒であった。二人はドイツ語研究を始めたが、もちろん当時は独和辞典なんぞないから、市川や加藤らは独・蘭対訳の文典等を解読して、自然にドイツ語をマスターしたという。なお、市川が福井藩の籍から正式に離れたのは、彼が幕府旗本に取り立てられた元治2年（1865年）である⁽¹⁵¹⁾。

維新後、市川はその見識を買われて明治新政府に出仕した。維新後の市川の経歴のうち、とくに注目したいのが明治2年（1869年）7月9日に設置された大阪兵学寮の教授となったことである。市川は明治5年（1872年）3月まで在阪するが、時期的に三崎の大阪舎密局勤務時代とほぼ重なっている。しかも、谷町に居を構えた市川には来客が多く、同じ在阪組で三崎の旧師にあたる何礼之は市川の交際相手の一人であった。また、福井藩の佐々木権六も来訪者の一人であった⁽¹⁵²⁾。三崎と縁がある人物は、市川宅の訪問者の常連だったわけである。市川は明治5年に大阪から東京に戻ったあとは、小川町のち三崎町に居住した。

三崎が江戸遊学以降に市川と直接顔を合わせる機会を持ちえたとすれば、その時期は①文久年間の江戸留学時、②明治2～3年の在阪時、③明治5年以降の東校在職時、の3つとなろう。筆者は東京

大学史料編纂所で保管されている市川の日記⁽¹⁵³⁾を調べてみた。その結果、②の在阪時期の日記に三崎の名が出てくることが分かった。もっとも、今のところ筆者が三崎の名を日記上で見出したのは明治6年5月1日付「三崎東行」、同月20日付「三崎帰坂」、同年6月1日付「三崎送」の3か所ぐらいである。前者二つはⅥ章①で述べた南校への出張のことである。市川と頻繁に交流があった佐々木権六や田中芳男らと比べると日記上における三崎の登場頻度は決して高くない。

三崎に限らず、市川の日記は全般を通じて「田中芳男来」(文久三年2月14日付)などのように簡略すぎる記述に終始しており、市川が来訪者と何をしたのか、何を談じたか等の情報はほとんど得られない。日記上に表れない交際事実も多々あるはずだ。日記からは市川と三崎の間に何らかの接点があったという程度の事しか証明されない。もっとも、市川は在阪時にハラタマ(日記上は「ガラタマ」と表記)とも何回か会ったことを日記に記しており、その時にハラタマ側の随行者として三崎が同席していたことも十分に考えられよう。化学やドイツ語習得について、三崎が市川から影響を受けたことは多少なりともあったのではないか。

三崎のドイツ学系統人脈の二人目の候補は司馬凌海である。三崎が長崎留学時代に司馬にオランダ語を習ったのではないかという芝哲夫氏の仮説は本章の①で棄却した。しかし、両人の経歴を追うと、ドイツ語について三崎が司馬と東京で談義することは可能であったことがわかる。司馬は佐渡島出身。オランダ語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語をこなしたほか、ロシア語、ラテン語、ギリシア語も多少使えたというから語学の天才というほかない。ドイツ語に関していえば、ドイツ語を初めて読めた日本人は加藤弘之だが、加藤ができたのはあくまで訳読であったのに対し、司馬はライティングと会話の両方ができた⁽¹⁵⁴⁾。司馬は維新後新政府に出仕し、医学校の二等教授となり、大学東校に改称後は少博士に任ぜられていた。この時、三崎は大助教であったから、三崎と司馬は同僚ということになる。また、司馬は明治3年から三崎同様に下谷に私塾を開いていた。その名を春風社という。春風社は4冊ものドイツ語教科書を出版するなど、明治初期のドイツ学塾としては有力な存在であった⁽¹⁵⁵⁾。勉学意欲旺盛な三崎が近所の塾経営者である司馬とドイツ学を介した親交を持った可能性はあったと言えるだろう。

IX. 謝辞

本稿を執筆するにあたり、貴重なご助言や史料を提供してくださった「福井古文書を読む会」の田原健子氏、福井県立図書館の長野栄俊氏、福井大学附属図書館の安野辰巳氏、福井県文書館の柳沢美英子氏、福井大学名誉教授の沖久也氏らに厚く御礼申し上げる。また、研究進行に多くの便宜をはかってくださった学習院大学史料館と東京大学総合図書館の方々にも重ねて御礼申し上げる。

X. 注釈および引用文献

- (1) 福井県出身の有名人物を多く収録した福井新聞編『福井県大百科事典』(福井新聞社、一九九一年)でも三崎は立項されていない。少々の歴史通程度では三崎の名を知る機会はほとんどないと思われる。
- (2) 前掲、福井新聞編『福井県大百科事典』
- (3) 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』(朝日新聞社、一九九四年)
- (4) 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『講談社日本人辞典』(講談社、二〇〇一年)
- (5) 菅原国香「三崎嘯輔の化学者としての活動」(『科学史研究』Ⅱ)二十三巻、一九八四年)
- (6) 石橋栄達「神陵史資料、三崎嘯輔先生、最初の邦人化学教育家」(『三高同窓会会報』一九五二年)
- (7) 藤田英夫『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』(思文閣出版、一九九五年)
- (8) 平成19年7月7日付福井新聞
- (9) 三高同窓会編『稿本神陵史』(三高同窓会、一九四九年)。以後、本文中で『稿本神陵史』と記す場合は注釈を付けない。
- (10) 小川明・中村邦光「三崎嘯輔と福井、周辺の人々」(『日本科学史学会年会研究発表講演要旨集』)

五十四卷.二〇〇七年). (8) の新聞記事は、この 2007 年の日本科学史学会の発表内容をもとにして
いると推察される。

- (11) 雑賀博愛『杉田鷗山翁』(鷗山会.一九二八年)
- (12) 椎原庸「ハラタマと大阪舎密局.一ただ一人の蘭人理化学教師の来日」(『化学と教育』三十七
卷五号.一九八九年)
- (13) 藤井哲博『長崎海軍伝習所』(中公新書.一九九一年)
- (14) 沼田次郎『幕末洋学史』(刀江書院.一九五〇年)
- (15) 「舎密学を興すの記」の原文については、明治文化研究会編『明治文化全集第七卷.外国文化編
(第三版)』(日本評論社.一九六八年)を参照。
- (16) 芝哲夫「舎密局」(『化学と工業』十九卷一号.一九六六年)
- (17) 藤田英夫「舎密局と京都大学.化学史的視点から」(『化学と教育』三十七卷五号.一九八九年)
- (18) 藤田英夫「大坂舎密局の遺産に関する化学史的調査」(『化学史研究』三卷.一九八三年)や芝哲
夫「大阪舎密局とハラタマ」(『化学と教育』四十四卷一号.一九九六年)など
- (19) 馬場金太郎・平嶋義宏『昆虫採集学』(九州大学出版会.一九九一年)
- (20) 倉田公裕・矢島國雄『新編博物館学』(東京堂出版.一九九七年)
- (21) 芝哲夫「大阪舎密局史」(『大阪大学史紀要』一卷.一九八一年)
- (22) 笹岡芳名『越藩福井医史及医人伝』(私家版.一九二一年)
- (23) 前掲、笹岡『越藩福井医史及医人伝』と福田源三郎編『越前人物誌.中巻・下巻』(玉雪堂.一九
一〇年)
- (24) 大武玄夫編『済世館小史(復刻版)』(福井市医師会.一九七一年).初版は一九三二年発行。
- (25) 松平文庫内の福井藩士の履歴は、福井県文書館編『福井県文書館資料叢書 9.福井藩士履歴 1.
あ～え』(福井県文書館.二〇一三年)と、福井県文書館編『福井県文書館資料叢書 10.福井藩士履歴
2.お～く』(福井県文書館.二〇一四年)で一部が刊行されているが、三崎一族の「士族」の履歴箇所
に関しては平成 26 年 9 月現在未公開である。
- (26) 福井県医師会・会史編纂委員会編『福井県医師会史第二巻・資料編』(福井県医師会.一九八六年)
- (27) 前掲、菅原「三崎嘯輔の化学者としての活動」
- (28) 前掲、菅原「三崎嘯輔の化学者としての活動」
- (29) 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち(6).舎密局をめぐる人びと」(『化学と教育』五十
二卷三号.二〇〇四年)
- (30) 前掲、石橋「神陵史資料.三崎嘯輔先生.最初の邦人化学教育家」
- (31) 福本龍『われ徒死せず.明治に生きた大鳥圭介』(国書刊行会.二〇〇四年)
- (32) 山崎有信『大鳥圭介伝』(大空社.一九九五年)
- (33) 明治 35 年 2 月 7 日付神戸又新日報
- (34) 『坪井為春先生伝』.著者、出版年ともに不明だが、京都大学附属図書館所蔵の原物には明治 7 年
官許『西薬略釋』という表紙が使用されている(注、筆者が閲覧したのはマイクロフィルム版)。
- (35) 前掲、笹岡『越藩福井医史及医人伝』
- (36) 松田清「坪井家旧蔵本の洋学資料」(『京都大学附属図書館報』三十一卷二号.一九九四年)
- (37) 永井環『新日本の先駆者.日下部太郎』(福井評論社.一九三〇年)
- (38) 長佐古美奈子「大鳥圭介関係史料について」(『学習院大学史料館紀要』十八号.二〇一二年)
- (39) 大鳥の書簡については、上郡町史編纂室編『上郡の古文書.大鳥圭介書簡集』(上郡町.一九九八
年).近松鴻二『大鳥圭介書翰その一』(『学習院大学史料館紀要』十八号.二〇一二年)や近松鴻二『大
鳥圭介書翰その二』(『学習院大学史料館紀要』十九号.二〇一三年)などで翻刻されているが、明治
期のものばかりである。
- (40) 前掲、長佐古「大鳥圭介関係史料について」
- (41) 福井県文書館編『福井県文書館資料叢書6.越前松平家家譜慶永 3』(福井県文書館.二〇一一年)

- (42) 日本史籍協会編『続再夢紀事・二（覆刻版）』（東京大学出版会、一九七四年）
- (43) 前掲、菅原「三崎嘯輔の化学者としての活動」
- (44) 史料「堺町守衛兵防戦雑記補遺」の「元治元子年七月十八日京都堺町御門防戦之際在京藩士名列」との日付は気になる点がある。禁門の変（＝堺町戦争）で戦闘があったのは7月19日である。何らかの誤記であろうか。
- (45) 前掲、大武編『済世館小史（復刻版）』
- (46) 前掲、永井『新日本の先駆者・日下部太郎』
- (47) 山田秋甫『橋本左内言行録』（橋本左内言行録刊行会、一九三二年）
- (48) 前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開・京都大学の源流』
- (49) 前掲、沼田『幕末洋学史』
- (50) 日本赤十字病院編『橋本綱常先生』（日本赤十字病院、一九三六年）
- (51) 中西啓『長崎のオランダ医たち』（岩波新書、一九七五年）
- (52) たとえば石橋重吉編『若越新文化史』（咬葉文庫、一九三八年）では、ボードウィンの福井出身者の弟子として、橋本綱常ら8人が挙げられているが、三崎はその中に入っていない。三崎は丸岡藩の竹内正信とともに、ハラタマ系列の洋学者とされているのみである。
- (53) 前掲、山田『橋本左内言行録』
- (54) 前掲、永井『新日本の先駆者・日下部太郎』
- (55) 許海華「長崎唐通事何礼之の英語習得」（『関西大学東西学術研究所紀要』四十四号、二〇一一年）
- (56) 大久保利謙「幕末洋学史上における何礼之、一とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流―」（『鹿児島県立短期大学研究年報』六号、一九七八年）
- (57) 長崎時代の前島は、福井藩が蒸気船の黒龍丸を購入する際、長崎在住の福井藩士の世話をした（通信協会編『郵便の父前島密遺稿集・郵便創業談』通信協会、一九三六年）。前島と福井藩士との交流も興味がわくところである。
- (58) 鈴木武史『星亨』（中公新書、一九八八年）
- (59) 前掲、大久保「幕末洋学史上における何礼之、一とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流―」
- (60) 「何礼之文書」（東京大学社会科学研究所所蔵）
- (61) 前掲、「何礼之文書」
- (62) 長崎大学医学部編『長崎医学百年史』（長崎大学医学部、一九六一年）。ちなみに、原平三『幕末洋学史の研究』（新人物往来社、一九九二年）などの引用から、分析究理所設立を元治元年（1864年）とするなど、同所の設立年の記述には一部混乱が見られる。たとえば、長崎大学薬学部のホームページには「1864年（元治元年）8月に養生所内に分析究理所が新たに設けられた」と記されている。正確には、元治元年は長崎奉行所が同所設立を準備した年であって、設立年は本文に書いたように慶應元年（1865年）である。
- (63) 芝哲夫「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（5）、ハラタマと舎密局」（『化学と教育』五十二巻二号、二〇〇四年）
- (64) 前掲、原『幕末洋学史の研究』。なお、精練方は学生が極端に少なく、化学教育機関として十分に機能したとは言えなかったようだ。
- (65) 芝哲夫「ハラタマと日本の化学」（『化学史研究』十八号、一九八二年）
- (66) 前掲、芝「ハラタマと日本の化学」
- (67) 前掲、芝「ハラタマと日本の化学」
- (68) 佐藤昌介「“日本の近代化学のあけぼの” 8. 化学教育のはじまり、一蕃書調所のばあい」（『化学と工業』二十九巻九号、一九七六年）
- (69) 芝哲夫「“日本の近代化学のあけぼの” 9. 化学教育のはじまり、一長崎分析究理所と大阪舎密局」（『化学と工業』二十九巻十号、一九七六年）
- (70) 前掲、永井『新日本の先駆者・日下部太郎』

- (71) 星亮一『会津戦争全史』（講談社選書メチエ、二〇〇五年）
- (72) 福井市立郷土歴史博物館編『橋本綱常博士の生涯、博愛社から日赤へ、建設期の赤十字人』（福井市立郷土歴史博物館、一九八八年）
- (73) 前掲、日本赤十字病院編『橋本綱常先生』
- (74) 前掲、山田『橋本左内言行録』
- (75) 前掲、永井『新日本の先駆者、日下部太郎』
- (76) 前掲、石橋『神陵史資料、三崎嘯輔先生、最初の邦人化学教育家』
- (77) 佐々木克『戊辰戦争、敗者の明治維新』（中公新書、一九七七年）
- (78) 前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』
- (79) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史、総説編』（財団法人京都大学後援会、一九九八年）
- (80) 芝哲夫「舎密局について」（『生産と技術』十六卷九号、一九六四年）
- (81) 有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅳ』（創元社、一九七七年）に収録。
- (82) 池内啓「杉田定一研究ノート、一血痕集とその前史」（『福井大学学芸学部紀要第三部社会科学』十八号、一九六八年）
- (83) 三崎が明治元年に東京に私塾を開いていたとする根拠は、「杉田定一関係文書」（大阪経済大学図書館所蔵）にある父・仙十郎から明治元年12月に定一に宛てた書簡にある「三崎塾ニテ」との文言である。しかし、最近の福井県内の歴史研究者の間では、この書簡は後に筆写された時の年代書き違いではないかという考えが有力である。実際に、杉田定一の生涯を詳細に追跡すると、明治元年の段階で杉田が上京していたとするのは無理がある。
- (84) 前掲、藤田「舎密局と京都大学、化学史的視点から」
- (85) 前掲、有坂編『日本洋学史の研究Ⅳ』収録の「舎密局創立之起源并爾来之記録」
- (86) 緒方富雄「短命であった大阪舎密局、一三つの資料の紹介」（『蘭学資料研究会研究報告』二七七号、一九七三年）や上田穰「大阪舎密局についての二、三の問題点」（前掲、有坂編『日本洋学史の研究Ⅳ』収録）
- (87) 前掲、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史、総説編』
- (88) 前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』
- (89) 「舎密局開講之説」の原文は、明治文化研究会編『明治文化全集第二十七卷、科学編（第二版）』（日本評論社、一九六七年）や樋口秀雄「資料に見る博物館史＜7-三＞」（『博物館研究』十五卷二号、一九八〇年）などを参照
- (90) 三高同窓会編『神陵小史』（三高同窓会、一九三五年）（国立国会図書館デジタルコレクション）
- (91) 前掲、有坂編『日本洋学史の研究Ⅳ』収録の「舎密局創立之起源并爾来之記録」
- (92) 前掲、三高同窓会編『神陵小史』
- (93) 前掲、三高同窓会編『稿本神陵史』
- (94) 前掲、芝「大阪舎密局史」
- (95) 前掲、京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史、総説編』
- (96) 前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』
- (97) 前掲、小川・中村「三崎嘯輔と福井、周辺の人々」
- (98) 福井大学附属図書館所蔵『グリフィス日記』（複写版）
- (99) 山下英一『グリフィスと福井（増補改訂版）』（エクシート、二〇一三年）
- (100) 福井大学名誉教授の沖久也氏が、この件に関する報文をしかるべき雑誌に投稿中であると聞いた。沖名誉教授は、大学東校所属の医学者たちの動向やグリフィスの手帳に記された「MisakiTamae」（＝三崎玉枝）とあるメモの存在などを根拠に、『グリフィス日記』に登場する「Misaki」は三崎嘯輔ではないと結論づけられている。
- (101) 「三崎玉雲家系図」（福井県文書館所蔵）
- (102) 前掲、山下『グリフィスと福井（増補改訂版）』

- (103) 三崎嘯講述・辻岡精輔録『新式近世化学』（得英学舎、一八七三年）（国立国会図書館デジタルコレクション）。なお、前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』は三崎が東京で開いていた塾名を、『新式近世化学』の出版元である得英学舎としている。
- (104) 本稿で参照したのは、東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史 上冊』（東京帝国大学、一九三二年）
- (105) 本稿で参照したのは、東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』（東京大学出版会、一九八四年）と、同『東京大学百年史 部局史二』（東京大学出版会、一九八七年）
- (106) 前掲、東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史 上冊』
- (107) 前掲、東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史一』
- (108) 医学校兼病院、のち大学東校は下谷和泉橋通りに所在した。大学所在地の昌平坂から見て東に位置するので大学東校と命名されたという（東京大学医学部百年史編集委員会編『東京大学医学部百年史』東京大学出版会、一九六七年）。
- (109) 前掲、石橋「神陵史資料、三崎嘯輔先生、最初の邦人化学教育家」
- (110) 小川鼎三「佐藤尚中と大学東校」（『日本医史学雑誌』二十九卷三号、一九八三年）
- (111) 前掲、東京帝国大学編『東京帝国大学五十年史 上冊』
- (112) 吉良枝郎「ドイツ医学導入とわが国の医学教育」（『内科』九十九卷三号、二〇〇七年）
- (113) 石井良助編『太政官日誌第六卷』（東京堂出版、一九八一年）
- (114) 前掲、朝日新聞社編『朝日本歴史人物事典』。なお、同じく三崎の略歴を収録している前掲、上田ら監修『講談社日本人辞典』には、三崎が和装で天皇の御前で実験したという逸話は紹介されていない。
- (115) 宮内庁編『明治天皇紀第二』（吉川弘文館、一九六九年）
- (116) たとえば、当時の文部卿の太田恭仁は日記をつけていたが、残念ながら明治5年当時のものはない。最も近い年代は明治3年9月～12月で、その後と言えば明治12年まで飛んでしまうようだ（星原大輔「幕末明治期の太田恭仁日記」『財団法人鍋島報効会研究助成報告書』四号、二〇〇九年）。一方、大隈重信は後年多くの回顧談を残しているから、明治5年の明治天皇の行幸に関連する回想がないか、現在探索中である。
- (117) 『式部寮 行幸録一 明治五年』（宮内庁宮内公文書館所蔵）
- (118) 前掲、芝「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（6）、舎密局をめぐる人びと」
- (119) 前掲、平成19年7月7日付福井新聞
- (120) 前掲、藤田『大阪舎密局の史的展開、京都大学の源流』
- (121) 木村直樹『＜通訳＞たちの幕末維新』（吉川弘文館、二〇一二年）
- (122) 前掲、芝「ハラタマと日本の化学」
- (123) 前掲、芝「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（6）、舎密局をめぐる人びと」
- (124) 前掲、芝「日本の化学を切り拓いた先駆者たち（6）、舎密局をめぐる人びと」
- (125) 前掲、長崎大学医学部編『長崎医学百年史』
- (126) 山本修之助『司馬凌海』（司馬凌海先生顕彰会、一九六七年）
- (127) 鈴木重貞「司馬凌海、一我国最初のドイツ語学者」（『四天王寺女子大学紀要』六号、一九七三年）
- (128) 沼田次郎・荒瀬進共訳『ポンペ日本滞在見聞記、一日本における五年間一』（雄松堂出版、一九六八年）
- (129) もっとも、海軍伝習所では語学を嫌い、オランダ語の授業をサボる学生も少なくなかったという（前掲、藤井『長崎海軍伝習所』）。
- (130) 福井県議会史編さん委員会編『福井県議会史第一巻』（福井県議会事務局、一九七一年）
- (131) 前掲、三崎・辻岡『新式近世化学』
- (132) 前掲、雑賀『杉田鴎山翁』
- (133) 家近良樹・飯塚一幸編『杉田定一関係文書史料集 第一巻』（大阪経済大学日本経済史研究所、

二〇一〇年)「サンフランシスコ到着につき妻へ通知の書簡」より

(134) 前掲, 芝「舎密局について」

(135) 内田正夫「三崎嘯講述『新式近世化学』(明治6年)について」(『化学史研究』三十八卷二号, 二〇一一年)と, 内田正夫「三崎嘯講述『新式近世化学』(1873)と George F. Barker, A Text-book of Elementary Chemistry: Theoretical and Inorganic (1870)について」(『化学史研究』三十九卷二号, 二〇一二年)

(136) 前掲, 永井『新日本の先駆者. 日下部太郎』

(137) 前掲, 福本『われ徒死せず. 明治に生きた大鳥圭介』

(138) 茂住實男「蕃書調所における英語教育」(『英学史研究』十六号, 一九八三年)

(139) 茂住實男「千村五郎. 一蕃書調所最初の英学教師」(『日本英語教育史研究』四号, 一九八九年)

(140) 堀孝彦「蕃書調所と堀達之助. 一市川兼恭「浮天斎日記」および久坂玄端の入塾一」(『英学史研究』三十五号, 二〇〇二年)

(141) 前掲, 芝「日本の化学を切り拓いた先駆者たち(6). 舎密局をめぐる人びと」

(142) 菅原国香「C.R. フレゼニウスのオランダ語版化学書の邦訳・抄訳書について」(『化学史研究』三十三卷二号, 二〇〇六年)

(143) 天野郁夫『大学の誕生(上)』(中公新書, 二〇〇九年)

(144) 原平三「幕末の洋学者市川兼恭の業績」(『史学雑誌』五十一卷七号, 一九四〇年)

(145) 福井県編『福井県史. 第二冊第二編藩政時代』(福井県, 一九二一年)

(146) 松村幹男「洋学者・市川兼恭について」(『日本英学史学会広島支部会報』十四号, 一九九一年)

(147) 前掲, 福井県文書館編『福井県文書館資料叢書9. 福井藩士履歴1. あ～え』

(148) 二見剛史「蕃書調所の成立事情」(『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』十集, 一九七九年)

(149) 原平三「幕末の独逸学と市川兼恭」(『史学雑誌』五十五卷八号, 一九四四年)

(150) 西周・加藤弘之『日本の名著 34』(中央公論社, 一九七一年)収録の加藤弘之『経歴談』

(151) 前掲, 原「幕末の洋学者市川兼恭の業績」

(152) 原平三『市川兼恭』(温知会, 一九四一年)(国立国会図書館デジタルコレクション)

(153) 市川兼恭『浮天斎日記』(東京大学史料編纂所所蔵)

(154) 前掲, 山本『司馬凌海』

(155) 前掲, 鈴木「司馬凌海. 一我国最初のドイツ語学者」



写真 福井市安養寺の三崎嘯輔の墓。
当時は「文昇院殿前正七位日下部尚之
之墓」と記されていたが、長い年月で
風化し、現在「尚之」の箇所は読むこ
とはできない。